やまびこ

砂防新道に建つ甚之助避難小屋（by N. Toga）

金沢大学ワンダーフォーゲル部 OB 会会報 vol. 30

「ベルクハイムへの憧れ、三度(みたび)。」

20 期　久冨 象二

高校時代の友人に、金沢で就職後山登りを始めた者がいて、話を聞くと、私にはついて行けそうもないハードな日程で難易度の高い日本アルプスなどの山を好んで登っていて、かなりの猛者です。その彼が、一度高三郎へ行ってみたいと言います。私はアプローチが長いし登山道も荒れているので、行く時は十分気をつけるよう話していますが、彼にとって高三郎は近くにありながら、容易に登れない近寄りがたい山のようです。

もう昨年になりますが、日本山岳会石川支部の西嶋さんから高三郎の登山道の状況について問い合わせがありました。私は犀川ダムまでの県道が通行止めになっていること、登山道が荒れているが少しずつ登山道の整備を進めていることなどをお伝えしました。西嶋さんからは、順尾山付近からダムサイトの谷へ向かうルートがあること、そして、高三郎の登山道整備は長年金大ワンゲルが行ってきた言わば専業なので、それを尊重して私たちはずっと見守ってきているのだとのお話がありました。

「日本三名山」は「富士山・白山・立山」ですが、一方「石川三名山」はというと「白山・医王山・高三郎」だ、という説を聞いたことがあります。これは高三郎がかつて県内の登山愛好家に白山・医王山と並んで親しまれた証であり、また今でも玄人筋には魅力のある山として評価されているからこその伝聞でしょう。

今年の春と秋の小屋酒場は、登山道の整備作業が進みました。松下さんから報告を寄せていただいていますが、学生が多数参加してくれましたし、何より学生のお母さんが、登山道整備に興味がある、とのことで参加いただきました。思わぬ方向から今後の展開が開けそうです。また、春は小屋酒場の 1 週間前に資材(現場で組み立てられるように細工済み)を船着き場まで、13 期の大島さんと辰野さんとで運び込みました。この際にも山本さんにボートを用意していただいており、本当にありがたく思います。小屋酒場は皆さんの努力と支援で進められてきています。

資材を運び込んでの大掛かりな小屋の修復作業は、今回で一区切りつけることにしていますが、今後はできるだけのメンテナンスを行って、ベルクハイムを長生きさせていきたいと思います。倉谷へ行ってベルクハイムを使うのが一番のメンテナンスです。そのためにも、ダムまでの県道の通行止めを何とかしなければ。

草刈、水場の整備、登山道の整備、小屋の掃除、大工仕事、食事の準備など、小屋酒場では、たくさんの仕事があり、皆さんとてもよく働かれます。かつて私は、小屋酒場へ家で読むと寝てしまう、サイードの「オリエンタリズム」をわざわざ持って行って囲炉裏のそばでビール飲みながら読んでいてやはり寝てしまいましたが、小屋酒場発足当初の主旨にあった、こんな時間の過ごし方をできるようにしたいなと思います。

ベルクハイムへの憧れは、まだ続きます。

目　次

				(頁)
ＯＢ会会長 あいさつ「ベルクハイムへの憧れ、三度(みたび)。」		20 期	久冨 象二	1
【小屋作業に寄せて】				
2015 年 小屋作業に参加して		20 期	松下 和隆	2
【ＯＢ会活動便り】				
近畿支部活動報告		11 期	加藤 忠好	7
東海支部活動報告　「養老山 PW」		17 期	渡邉 和文	13
関東支部活動報告　「福島の合津邸を尋ねて」		9 期	山中 重夫	14
スキー合宿報告「老体にムチ打ち　野沢のゲレンデに立つ」		9 期	山中 重夫	16
【同窓会便り】				
11 期会（いちごの会）2015 年 活動報告		11 期	井上 史三	18
KUWV13 期“まれの里能登”を訪ねて		13 期	大島 良治	20
15 期同期会　上越のお酒を堪能する旅		15 期	舟田 節子	22
23 期同期会　於金沢		23 期	名倉　均	26
【現役より】				
主将あいさつ	主将	59 期	山路 遼太郎	29
夏合宿　ＩＮ 南アルプス		59 期	山本 涼平	29
夏合宿　南アルプス		60 期	松山 諒佑	30
尾瀬合宿		59 期	川堰 匡崇	31
ワンダーフォーゲル部に入って		60 期	岡本 佳乃子	32
【投稿の頁】				
黒部五郎は遠かった		6 期	合津　尚	33
旅が呼び起こしたラジオの記憶		10 期	吉野 和彦	35
深田久弥＆山唄＆坂網猟		15 期	舟田 節子	37
南緯 51 度の追憶　パタゴニア・パイネ山群		17 期	小島　敬	41
近年の、外国での記憶から		11 期	長岡 正利	45
【事務局から】				
編集後記				50

表紙の言葉＜甚之助避難小屋＞(栂　典雅/19 期)

近年、白山の登山者数は４万人前後で推移している。これは、環境省が各登山道に設置した赤外線カウンターのうち、市ノ瀬･別当出合と岐阜県の大白川を登山口とする５本の登山道の登りの数値を集計したもので、この数には、たとえばチブリ尾根のブナ林までの日帰りハイカーは含まれ、逆に中宮道や加賀禅定道などから山頂を目指した登山者の数はみていないが、当たらずとも遠からずであろう。ちなみに、室堂と南竜山荘等の宿泊者数は２万 5,６千人なので、日帰り登山者が４割ほどいて、増加傾向にあるようだ。

その４万人の登山者のうち、砂防新道を登る者は３万人前後と７割を超え、次いで平瀬道の 5,６千人、観光新道の 3,４千人と続く。甚之助避難小屋は、最も利用者の多い重要な避難小屋として、以前のような県営ではなく、環境省の直轄事業で 2010 年に竣工。トイレが水洗になり、旧の小屋跡は園地として整備されるなど快適･利便性が向上した。

表紙写真：栂 典雅（19 期）表紙題字：中川 晃成（23 期）

2015 年 小屋作業に参加して

20 期　松下 和隆

日程

・ 2015 年春、5 月 30 日～5 月 31 日（1 泊 2 日）
・ 2015 年秋、10 月 3 日～10 月 4 日（1 泊 2 日）

参加者

・ＯＢ（11 名）

大島良治（13 期）、辰野隆義（13 期）、吉本良治（13 期）、上馬康生（15 期）、奥名正啓（15 期）、北川隆次（16 期）、中野淳一（16 期）、上田さん（17 期）、久冨象二（20 期）、松下和隆（20 期）、黒崎敏男（22 期）

・現役（ 9 名）

池田勇馬（57 期）、立花良彬（58 期）、田所耕平（58 期）、田巻柊野(58 期)、田村隆典(58 期)、小濱祐里（58 期）、太田和幸（59 期）、山本涼平（59 期）、山路遼太郎（59 期）

・ゲスト（ 1 名）

田所ママさん（58 期田所君のお母様）

そうだ、ベルクハイムへ行こう！

どこかで聞いたことのあるCMフレーズのようですが、十数年ぶりに小屋作業に参加した僕の気分は、まさにこんな感じでした。

春には新緑の息吹が溢れ、秋には紅葉の静寂が身も心も包んでくれる、癒しの地。ナタや鎌を通じて肉体労働の喜びを教えてくれた、学びの場。犀奥、そして白山へと続く長い道のりに夢を馳せた、ロマンと冒険の地。そうだ、ベルクハイムへ行こう！

久冨 OB 会長から小屋作業へのお誘いを頂いた時、僕の DNA はザワザワと騒ぐのでした。

県道 207 号線

この県道は、駒帰から犀川ダムまでを、新人トレーニングで何度も歩いた懐かしの林道です。距離にして約 8 キロ、歩数にすると（確か）20530 歩ぐらいのはずです。この歩数は、30 年前、当時の新入生（升村君だったかな）が、僕の前を歩きながらひたすら数えあげた実測値です。なので、間違いないでしょう。恐るべし、人間万歩計！

そんな思い出深き林道も、今では自由に出入りすることができません。途中の寺津に、ゲートが常設されてしまいました。「落石のため通行止め」ということですが、久冨 OB 会長は、借用した鍵で難なくゲートを開けます。よって、僕らはめでたく進入。20 分ほど車を走らせて、犀川ダムに到着です。

路面には、こぶし大の石ころがときおり散乱しており、運転には神経を使いますが、道の舗装状態は概ね良好のようです。この道が通行止めなんて、ちょっともったいないなぁ、と感じました。「犀奥を愛する市民の声」みたいな投書が北国新聞にでも載れば、ひょっとして、当局も少しは動いてくれるかも…。そんなことを、揺れる車の中で思ったりしていました。

そうこうしているうちに、犀川ダムに到着です。湖面の遥か向こうには、おなじみの高三郎が見えます。ちょっぴり顔を出して、僕らを出迎えてくれました。

犀川ダムにて、春の小屋作業集合写真

湖面の道

ダムが満々と水を湛えている年は、湖面をボートで行くことができます。ボートは、新緑の息吹に包まれながら、鏡のような湖面を颯爽と滑り抜けていきます。春風を体一杯に感じます。この解放感は、春の小屋作業でしか味わえない、なんとも贅沢な気分です。

人や資材を満載したボートは、エンジン音を軽快に轟かせながら、倉谷の船着き場へと僕らを運びます。ボートを操縦するのは、倉谷出身の山本さん。小屋作業の良き理解者で、毎年、大変お世話になっています。本当にありがたいことです。

遠くを見つめる山本さんの眼差しには、倉谷への深い愛着を感じます。素朴で朴とつとした人柄は、まるで高倉健のように渋い。ワイルドな風貌からは、自然と戯れる遊び心が滲み出ています。なんとも魅力的な人でした。

山本さんと小濱さん（現役58期）のツーショット写真は、まるで映画のワンシーンの様です。ボートで娘を送る親爺。無口ながらも、元気で暮らせよと胸の奥で静かに語る。娘もまたそれを心で感じている。別離ゆく親子、切なき思い。船のエンジン音だけが、それをかき消していく・・・。うーん、名場面だ。映画監督になった僕は、一人かってに、船上で夢想していました。

映画のワンシーンみたい、山本さんと小濱さん

ベルクハイムへの道

倉谷の船着き場まで来ると、憧れのベルクハイムは、もう目と鼻の先です。特に、ボートが使えなくなる秋の小屋作業では、倉谷のつり橋まで来ると、やっと着いたという安堵感でほっとしたものです。でもそれは昔の話になってしまいました。今はちょっと違っていて、新たな難所がベルクハイムとの間にできてしまいました。それも状況によっては、かなりの運動神経が問われます。

かつては石積みで、水面から1メートルぐらいの高さにあった測量計周辺の道が、今は水没してしまいました。（先ほどの）山本さん達のご尽力により、一部補修（川渕に沿ってロープと丸太棒を敷設）されましたが、これも状況によっては水没してしまいます。そうなると足場はもはや無くなり、山靴を水中にドボンと浸すしかありません。この難所を濡れずに通過できるのは、おそらくスパイダーマンもどき（岩肌のちょっと上あたりを腕力頼みで張り付き移動できる）超人だけです。そう言えば、春の小屋作業で一人だけいました。田所ママさん、恐るべし！

水没した道、測量計周辺にて

高三郎への道

高三郎は、僕の脳裏に深く刻み込まれた、思い出深い山です。新人トレーニングや夏合宿トレーニング、そして小屋作業など、何かにつけよく登りました。高三郎は犀奥への玄関でもあり、その先には、ワンゲル平、見越、奈良、大笠、笈ヶ岳が続き、そのひとつひとつに、仲間と共有した青春の思い出があります。そのシンボルとして、高三郎という名前は、僕の心に深く刻まれています。

金山谷を渡ると、高三郎へと至る新道の登山口に到着です。かつては渡渉していた金山谷も、今ではアクロバチックな橋（２本の丸太棒）がかかっています。雨に濡れていると最悪です。ツルッと滑って谷へ転落するのはきっと俺だ、というイメージが、どうしても脳裏をよぎります。現役生は、楽しそうにスイスイと渡ります。しかし僕は、へっぴり腰でヨチヨチと渡ります。

アクロバチックな橋、金山谷にて

新道は、近年あまり使われなくなってしまい、藪や倒木で通行が難しい状況でしたが、ここ数年の小屋作業により少しずつ整備が進んできました。現在（今年の秋）の状況では、ベルクハイムと高三郎とのちょうど中間点あたり、「栃倉分岐」（標高 920m）まで整備が進みました。ここまでなら、一般登山者でも問題なく歩けると思います。

ここまでの道整備は、鎌やナタによるブッシュ刈りを主な作業として実施してきました。そのため、道を塞ぐ巨大な倒木などは、そのままの状態です。3～4 本はあるでしょうか。これらの本格的な対処には、チェーンソウなどの機具が必要になるかと思われます。

栃倉分岐から先は、いよいよクラコシ尾根です。細い尾根が続きますが、これまで以上に濃密なブッシュ（主に灌木）が続くようです。本格的な道整備は、むしろここから始まると言えるかもしれません。加えて、栃倉分岐までのアプローチ時間も負担になってきました。片道 2 時間、往復で 4 時間。これほどアプローチに時間を費やしていたのでは、十分な作業はままなりません。ベルクハイムから通いで行う作業形態は、もはや限界に来たと言えるかもしれません。この先、何らかの工夫が必要かと思われます。

栃倉分岐では、風雪で地べたに落ちた標識が、そのまま放置されていました。人足が遠のいた新道の現在を物語っています。あまりの哀愁に感動してしまい、皆で記念写真を撮りました。その標識には、高三郎まで 140 分、と記されています。高三郎への道のりは、まだまだ遠いです。

栃倉分岐にて。高三郎まで「140 分」、まだ遠い！

ベルクハイムの修復

小屋酒場に欠かせないものと言えば、やはりトイレでしょう。春の小屋作業では、そのリフォームを実施しました。設計は OB 辰野さん（13 期）がなされ、パーツの作成は OB 有志の匠達によって事前に準備されました。

山積みの資材を、倉谷の船着き場からベルクハイムまで、皆で協力して運びます。人海戦術で運ぶ様は、さながら、アリの行列のようです。大勢で共通のゴールに向かって黙々と歩く行為は、不思議と気持ちがシンクロしてきます。連帯感が、自然に芽生えてきます。現役生もＯＢも一緒になって汗を流すこと、それ自体が小屋作業の魅力でもあります。ベルクハイムまで、あともう一息。みんな、頑張ろう！

資材の運搬、アリの如く。倉谷廃村近くにて

パーツが揃えば、組み立ては早いものです。プラモデルを作るがごとく、あっという間に、素晴らしいトイレができあがりました。新道の整備から帰ってきた僕には、少なくとも、そう見えました。

真新しい木の香りは、リフォーム感を引き立ててくれます。囲いのトタンは、ガルバリウム鋼板でしょうか、錆への対策も万全です。もちろん水洗トイレで、水は流しっぱなし。清潔感も申し分ありません。記念すべき使用第一号は、現役の田村君（58 期）。便通式も無事終わり、今は一般公開されています。お立ち寄りの際は、ぜひ一度ご利用下さいませ。

ベルクハイムの新トイレ。快適だ！

感想と今後について

（１） 指差し点呼

刃物を取り扱う場合は、よりいっそうの注意が必要です。ナタや鎌は、小屋作業では当たり前の様に使う道具ですが、ちょっと気を抜くと思わぬ怪我に繋がってしまいます。秋の小屋作業では、鎌の取り扱いミスで、現役生の一人が残念ながら負傷してしまいました。木の枝を切り損じて、左手の甲を鎌で切ってしまいました。幸いにして、そばに居合わせた池田君（現役生 57 期）の止血応急処置が的確だったので、大事に至ることはありませんでした。しかしこの一件は、鎌などの刃物がもつ危険性を、我々に強く再認識させてくれました。日常性に潜む危険性は忘れがちです。これを予防するのには、ちょっと泥臭いかもしれませんが、駅員さんがいつも行っている「指差し点呼」が一番です。我々も、鎌の使用前には、皆で声を揃えて「軍手よ～し、刃先を向けるな～」と大きな声で唱えましょう。

軍手よ～し、刃先を向けるな～！

（２） 高三郎への道

新道の整備は、先にも述べましたがベルクハイムと高三郎との中間点（栃倉分岐）まで来ています。ここまで来たら、やはり、高三郎までは一本通したいものです。そうすれば、過酷な藪漕ぎをしなくても、犀奥を愛する誰もが、高三郎へと楽しく登山できるようになります。これは素晴らしいことだと思います。

ベルクハイムからの通いで作業する形態は、アプローチ時間が長く、もはや限界に来ていると思われます。となると、現場（栃倉分岐）近くにテントを張って、集中的に作業をした方が作業効率も断然アップします。水場（提案 1）さえ確保できれば、これも一案だと思います。

（提案１）実は栃倉分岐近くに水場がある、という情報を、先日、福島でお会いした OB 長岡さん

（11 期）から入手しました。分岐から栃倉方向へ行った最初の鞍部、その左側（犀川支流へ下る谷）付近に水場があるらしいとのことです。機会があれば確認してみたいと思っています。

（提案 2）地図を見ると、分岐から栃倉、成ヶ峰を経由してベルクハイムへ向かう尾根があります。この尾根は、高低差がほとんど無いまま長く続き、ベルクハイムの直ぐ裏近くにまで至ってます。そこでもし、この尾根がうまく活用できれば、第 3 の道「ベルクハイム新道」（仮称）もありうるのかな、と思いました。ベルクハイムの裏から直接、高三郎へ登ることができます。更に、この道を、水没した測量計周辺を回避する高巻きの道に繋げれば、倉谷の増水を気にせずに登れる、より安定した登山道が、ひとつ確保できるように思えます。但し、実現性については、今現在まったくの未知数です。まずは知見者の方々のご意見を伺うところから始めるべきでしょう。この尾根は、OB 栂さん（19 期）が一度歩いたことがあると聞いていますので、機会があればお話しを伺ってみたいと思います。

（３） ベルクハイムへの憧れ、再び

久冨 OB 会長が、前回「やまざと」の巻頭言で使ったタイトルを、そのままパクリました。なぜなら、僕も同感だからです。

ベルクハイムは、ワンゲルの遺産だと思います。先輩から後輩へと引き継がれ、多くの思い出を築いてくれました。倉谷に小屋があるというその思いは、犀奥をよりいっそう身近なものにしてくれます。時には、親交を深める小屋酒場として、時には、山深い犀奥へのベースキャンプとして、これからも多くの人々に愛され、親しまれ続けることを切に願うしだいです。

そのためには、ベルクハイムが活用され続けることが一番です。沢釣りで利用するのもよし、卒論研究のフィールドキャンプとして利用するのもよし、一人静かに哲学するのもよし。中には、英ネイチャー誌への論文執筆を越冬覚悟で試みる先輩もいました。登山以外の用途においても様々にベルクハイムが活用されれば良いと思います。特に現役生には、その柔らかい頭脳を使って、思う存分、ベルクハイムを活用したおしてもらえれば良いなぁ、と思います。

倉谷と犀奥は、昔も今も、「冒険フィールド」として魅力的です。学生時代に刷り込まれた感動は忘れがたく、ベルクハイムへの憧れは再び蘇ってきます。今回の小屋作業で、僕はそれを実感しました。

現役生とＯＢとの団欒、黒崎シェフの料理を囲んで

秋の小屋作業集合写真、愁心碑にて

近畿支部活動報告

1．京都・清滝川散策Ｐｗ

・実施日　2014 11/30(日)　雨天で延期

・コース　ＪＲ保津峡駅～落合～清滝～
　　神護寺～（高山寺：オプション）

・参加者　(12 名)　　〈§：夫婦で参加〉
　篠島⑧、藤井直⑩、高田⑩、畔山§⑪、加藤§⑪
　森川⑪、楠屋⑭、宇野§⑮、三宅⑮

・報　告

11/29 が雨予報のため、翌日 11/30 実施とし新規に参加者を募集した。企画の伊豫夫妻が参加できなくなったのが残念。

このコースは、自動車道の部分はあるが、交通量が少なく気軽に歩けるハイキング道である。ＪＲ保津峡駅からすでに紅葉が始まっていた。保津川峡から支流の清滝川に入るとぐっと谷間の趣が増す。が、洪水の影響だろうか、道は相当に荒れていた。

清滝に入ると突然紅葉が襲いかかってきた。見頃を少し過ぎていたが、それだけに静かだった。清滝川の河原で昼食、京都の有名観光地に挟まれた場所なのに、さほど人が多くなく自然を満喫することができた。

紅葉の神護寺をゆっくり歩き、一応解散、11 名が高山寺に向かった。紅葉期だけという入山料 500 円を納め見頃の紅葉を楽しんだ。ついでに国宝石水院に入り鳥獣戯画を至近距離で鑑賞。もちろん模写であるが、堂内で見られるというのは実にいいものだ。時刻も遅かったせいもあり、石水院は貸しきり状態。縁側に腰掛け歓談。まさに、秋の京都を楽しむ至福の時が流れていた。

2．和気アルプスＰｗ

・実施日　2014 12/23(火：祝)

・コース　ＪＲ和気駅～和気観音～間ノ峰～
　　穂高山～槍ヶ峰～鵜飼谷温泉=JR 和気駅

・参加者　(11 名)　　〈§：夫婦で参加〉
　金岩⑤、伊豫§⑧⑩、加藤§⑪、赤地§⑫⑭
　宇野K⑮、間所§⑮、三宅⑮

・報　告

和気は備前・和気清麻呂の出身地である。ここの岩山が和気アルプスと呼ばれる山塊である。面白半分で名前をつけたのではなく、それなりの風貌をしているから感心する。

ＪＲ和気駅 10：15 の集合だったが、姫路行きの新快速の中で全員が集合できた。

低山というのは登山口までが難しい。今回は懸造りの和気観音を目指した。アルプスらしく、いきなりの急登、しかし 5～6 分で観音堂に到着。吉井川の眺望を楽しみ、今日の安全を祈願した。さらに 10 分ほどで稜線に出た。ここからが気持ちのよい稜線歩きだ。とはいえ、あっという間に有名な山を通り過ぎるので、山行計画が重要となってくる。

エビ山を過ぎると岩が露出し、アルペンムードが高まる。標高 150mとは思えないほどの気持ち良さである。なが～い昼食は、穂高山を眺めながら間ノ山の頂上で食べた。

5～6 分歩いて穂高山。さらに 5～6 分歩いて涸沢峰。このあたりは立ち止まって見たくなる岩の稜線歩き。しかも歩きやすい道だ。涸沢峰からは低木の樹林帯に入る。ジャンダルム、奥ノ峰を過ぎ、最後の登りが槍ヶ峰である。槍ヶ峰では、征服したピークを指折り数え満足げに眺めた。最高峰は 274mの奥ノ峰であるが満足度は 10 倍くらい大きい。

鵜飼谷温泉には 15 時半頃到着。ゆっくりと温泉を楽しみ、和気駅までタクシーでもどり、神戸駅で

打ち上げ、21 時ごろ解散した。

３．高安山&信貴山Ｐｗ

・実施日　2015 1/17(土)
・コース　近鉄恩智駅～恩智神社～
　　恩智越～のどか村～信貴山寺～
　　(～信貴山頂往復)～近鉄信貴山下
・参加者　(16 名)　　〈§：夫婦で参加〉
　　金岩⑤、伊豫§⑧⑩、高田⑩、藤井⑩
　　畔山§⑪、加藤§⑪、森川⑪、楠屋⑭
　　上馬⑮、宇野K⑮、金井⑮、間所§⑮
・報　告

昨年の新春は生駒聖天さん、今年はその南に位置する大寅で有名な信貴山に出かけた。

近鉄恩智駅 9：30 に 15 名がそろった。恩智神社は、「元春日」と呼ばれるようにその創建はすこぶる古い。昔の恩智越えは、谷筋を通っていたようであるが、現在は神社の裏手の林道が登山道である。

切通しの恩智越え（峠）から、のどか村に立ち寄りトイレ休憩。谷あいに建っている南畑の集落では今でも多くの大和造りの家が残っていた。珍しい構造で登録有形文化財の開運橋を渡るといきなりの注連縄。ここでは神仏混淆が息づいているようだ。神社では徹底的に仏教色をなくしたのに比べ、寺ではそれが緩やかであったことを物語っている。

朱印所でもある休憩所に金井さんが待ちくたびれていた。ここで昼食。木造堂内での火器使用は無理。スープ材料の入った重いザックを担いできた伊豫さんには申しわけないことになった。寒いと思ったら雪が舞ってきた。まだ、濡れたくない季節、予定変更し、高安山をカット。信貴山頂は往復。下山も奈良県側の信貴山下駅へと変更した。

よって、信貴山寺をじっくりと見ることになった。大寅、毘沙門堂、本堂、信貴山山上の空鉢護法堂と回った。山上からは法隆寺五重の塔の水煙と夢殿の宝珠と重なって見えることが確認された。

現世利益の匂いがプンプンする寺だが、そのわかりやすさが現代人に受けているのだろうか、まさに繁盛している感じであった。

下山後に鶴橋で打ち上げ、20 時頃解散した。

４．三輪山登拝Ｐｗ

・実施日　2015 2/14(土)
・コース　三輪駅～（三輪町めぐり）～
　　大神神社～美和の森展望台～狭井神社～
　　三輪山（奥津磐座）～狭井神社～三輪駅
・参加者　(15 名)　　〈§：夫婦で参加〉
　　金岩⑤、伊豫§⑧⑩、藤井⑩、高田⑩
　　畔山§⑪、加藤§⑪、森川⑪、赤地⑭
　　楠屋⑭、高村⑮、間所§⑮
・報　告

ご神体の山でも登山できる山は多々ある。それでも、神話で有名な三輪山は登山禁止である。絶対かというと、山頂に三角点があることからも、例外もあるらしい。なにやら狭井神社からの許可が必要なのだ。

条件もある。飲食、撮影はもってのほか、初穂料 300 円納め敬虔な気持ちで登拝することなどである。登山ではない。

三輪駅に 10 時ごろ全員集合した。三輪山登拝中は飲食不可なので、昼食時間調整のため三輪町巡りをした。庄屋、素麺問屋、素麺製造屋、酒屋、和菓子屋、元海石榴市の神社など、古い町並みや見るべきものが多く残るのに観光化していない。一の鳥居、大鳥居、二の鳥居を経て大神神社に参拝、昼になったので信徒会館で昼食とした。

途中の「三輪の森」展望台で大和三山を愛で、時間切れという赤地さんを見送った。狭井神社に着き、初穂料を納めると即刻全員に入山許可のタスキが渡された。

参拝道は整備されていて登りやすいが、樹木が生い茂り展望が利かない。途中、三光の滝の休憩舎（水垢離用更衣室）と中津磐座という岩があるだけで単調な登りであった。

山頂の奥津磐座というのは、大岩ではなく岩原であった。付近で三角点をさがしたが、あたりは立ち入り禁止になっているので見つけられない。あきらめかけたが、少し戻った場所で三角点が見つかったとのこと。周囲一帯は樹林、当時はどのようにして測量したのだろうか。撮影禁止なので三角点の写真ですら撮れなかった。心残りである。

狭井神社に戻って記念撮影。霊泉を心ゆくまで飲んだ。時刻も15時半になったので、桜井までの歩きを止め、三輪駅に向かった。

鶴橋駅ホームは近鉄とガード下の焼肉屋とがタイアップしているのだろうか。いつも焼肉の煙で充満している。「一度ここで食べたいね」が畔山さんの案内で実現した。身も心も焼肉の煙に燻された。解散は20時頃。

５．雲上の高取城と城下の雛祭りＰｗ

・実施日　2015　3/14(土)

・コース　壺阪山駅＝壺阪寺～壺阪峠～
五百羅漢～高取城～猿石～砂防公園～
土佐城下（雛飾り見物）～壺阪山駅

・参加者　(16名)　　<§：夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫§⑧⑩、藤井N⑩、畔山§⑪
加藤§⑪、森川⑪、野村⑫、楠屋⑭上馬⑮
宇野§⑮、金井⑮、三宅⑮

・報　告

山城として有名な高取城、司馬遼太郎の「ああ大砲」の舞台となったのはその城下の土佐の町である。家々に雛を飾る３月、今ではそれを目当てに観光客が大勢くる。

前日、企画者から「気になる天気ですが実施」とのメールが届いた。壺阪駅10時の集合。驚きの楠屋さんが居た。雨も止んできた。トイレを済ませバスで壺阪寺へ。

森川、金井の両名が合流し全員がそろったと思ったら雨がポツリと降ってきた。壺阪峠からは山道である。微妙な雨の中、五百羅漢を経て約1時間で壺阪門跡に着いた。このあたりから、城跡の石垣が明確になってきた。

城下町の標高が約120m、そして天守台の標高が583.6m。よくぞこのようなところに石垣を積んだものだと感心する。広範囲かつ石垣の高さも平城に負けていない。

天守台の三角点前で記念撮影したが、寒くなってきた。風を避け天守台の石垣の下で昼食をとっていると、そのうち霰までもが降ってきた。３月、それに展望も利かないので、そそくさと下山することになった。

帰りは城下町へ続く道を下った。大手門、矢場門、二ノ門、一升坂、七曲り、休憩地の砂防公園まで約1時間かかった。城下町まで、まだ1kmはある。下りでも結構歩く。高取藩士のお城勤めは大変だったろうと思った。

ここまで下ると不思議に晴天が広がっていた。公園でトイレを済ませ、間所さん差し入れの羊羹や宇野さんが持って来た棹もので大中小に興じた。

のんびりと城下町に入り、思い思いに雛飾りを楽しんだ。近鉄橿原神宮駅17時頃解散。11名が駅構

内のおでん屋で打ち上げ反省会を楽しみ 18 時半頃ＰＷが終了した。

６．名勝赤目四十八滝Ｐｗ

・実施日　2015 4/18(土)
・コース　近鉄赤目口駅＝(バス)＝赤目滝～
滝めぐり(不動滝、千手滝、布曳滝、荷担滝、琵琶滝など)～延寿院～赤目滝＝赤目口駅
・参加者　(11 名)　〈§：夫婦で参加〉
金岩⑤、篠島⑧、藤井§⑩、畔山§⑪
加藤§⑪、森川⑪、楠屋⑭、三宅⑮
・報　告

戦後まもなく観光地百選という企画があり、その中の「瀑布」の部門でトップに選ばれたのが赤目四十八滝である。

大阪・上本町から急行で約 1 時間、近鉄赤目口駅になんとか全員集合した。「三重県へようこそ」森川さんが出迎えてくれた。ここから三重交通のバスで約 15 分、赤目 48 滝の入口に着いた。少し歩けば滝入場の料金所、割引切符の威力で 400 円を支払うことなく入場できた。サンショウウオも見られた。

突然の渓流に歩みが遅くなる。赤目 48 滝の特徴は、ほとんどが本流の滝であるということだ。それゆえ高さはさほどでもないが、それぞれの滝壷が巨大な甌穴のよう。深く澄んでいる。霊蛇滝と不動滝が２連となって高度を稼ぐ。しばらく行くと岩を洗う千手滝とその上に細く流れる布曳滝、滝壷が恐ろしいくらい深い。実に心地良い変化だ。ここからは瀬となり淵となる。

12 時もかなり過ぎた頃に百畳岩の広場に着いた。岩に座し、飯を食い、仰げば淡い芽吹きの色が青空に映える。森川宗匠による抹茶をいただく。実にうまい。

笄滝でトイレ休憩。引き返す様子のない金岩さんを追いかけるように上流に進むと荷担滝に出た。これが切手図案の滝、幸福感が身体に満ちてきた。さらに最奥の巌窟滝までを堪能。今度は見返りの滝を楽しんだ。

琵琶滝、琴滝、雛段滝、夫婦滝、荷担滝、斜滝、骸骨滝、雨降滝、笄滝、柿窪滝、姉妹滝、陰陽滝、斧が渕、竜ヶ壷、布曳滝、千手滝、乙女滝、不動滝、霊蛇滝、行者滝、大小の滝が続く中で知らぬ間に標高差 200m を下っていた。

16 時半頃赤目口駅で森川さんと別れ、大阪方面の人たちは、鶴橋の貸しきり状態ちゃんこ鍋屋で反省会をした。三宅さんの案内であったが、気がつくと知らない店だったようで爆笑、20 時過ぎに解散した。

７．洛北遊歩Ｐｗ

・実施日　2015 5/16(土)
・コース　JR 京都＝(京都バス)＝大原～
寂光院～翠黛山～金比羅山～江分峠～
静原～薬王坂～鞍馬＝(叡電)＝出町柳
・参加者　(16 名)　〈§：夫婦で参加〉
金岩⑤、伊豫§⑧⑩、篠島⑧、高水間⑧
高田⑩、藤井§⑩、畔山K⑪、加藤§⑪
赤地⑭、宇野K⑮、間所§⑮、三宅⑮
・報　告

建礼門院、牛若丸など敗者が住んでいた洛北、大原と鞍馬をつなぐ山越えの道、その延長に比叡山がある。一帯は行者の道である。

季節も良い。久しぶりに登山らしい企画が出された。当日は怪しい天気、森川さんから草津線が雨で不通のため参加できない旨のメールが届いた。

それでも「舞子はんがいる鴨、川付近のスペイン料理夕食会付き」のキャッチフレーズのお蔭か、京都駅9時には16名が集合した。バスが大原に着く頃には青空も覗いてきた。

寂光院からは急激な登り、まだ暑さになれていない体からは汗が噴き出す。約1時間の登行で第1目標の翠黛山に着いた。ここから稜線歩き、往復なら三角点を確認は不要ということで、金毘羅山最高地点直下の神社の前に落ち着き遅い昼食となった。

食後、ロックゲレンデをしばし眺め下山。琴平新宮でトイレ休憩。下山後、大原経由で帰るという高田さんと別れた。ここから静原神社へは平坦な歩きやすい道であった。静原は川を避け山側に家々が建っていた。とり残されたような穏やかな集落のように見えた。「ほぼ平坦な薬王坂」と行者頭の企画者が言っていたが、なかなかの坂であった。

後日、キッコちゃんから「観受想行識：険しい山もほぼ平坦と見れば楽しんで行こうとする行動になって、その行動が良き一日を過ごせたと記憶され、また行きたいと欲す」とのメールを受け取った。けだし慧眼なり。

大木に食い込む二尊板碑があった。さすがに歴史の道だ。17時頃鞍馬寺の門前で記念写真を撮り、叡電で出町柳に向かった。

テラスでのスペイン料理というのは、玄関先で主としてアヒージョを食べることだった。パンに味付オリーブ油をたっぷり染み込ませて食べるのも、それはそれでなかなか美味かった。19時半過ぎに解散した。

8．高野三山Ｐｗ

・実施日　2015　6/6（土）

・コース　高野山駅＝(バス)＝奥の院前～
登山口～摩尼峠～摩尼山～黒河峠～
楊柳山～子継峠～転軸山～大師廟～
奥の院前＝(途中買い物)＝高野山駅

・参加者　(11名)　　〈§：夫婦で参加〉
金岩⑤、伊豫K⑧、篠島⑧、高田⑩、藤井N⑩
畔山§⑪、加藤§⑪、楠屋⑭、宇野A⑮

・報　告

女人道。まるで入場券を持たない人達が、どこかに覗き込むところがないかと競技場の周囲をグルグルと周っているようなものである。ちょっと哀しげである。

高野山の女人堂は、このような女人堂と山内への道との交点にいくつかあったようである。今回は敬虔な女心を実践的に深く知るべく藤井さんが企画したものである。

大阪から南海を使えば高野山駅まで約1時間、そこからバスで約20分、奥の院の入口に着いたのは、11時を過ぎていた。

三山巡りの登山口からしばらく歩き、昼食とした。摩尼峠へは約30分、摩尼山に着いたのは13時頃だった。雨が降りそうな天気であったが、やはり6月。暑い。この三山巡りは大師廟を取り囲んでいる稜線道であるが、高野槇や生い茂る樹林に遮られて廟は見えない。しかも山内と違いアップダウンの道である。ほんに「女は強し」である。

摩尼山、楊柳山、転軸山に小さなお堂があった。女人堂跡地の摩尼峠、黒河峠、子継峠にも祠があった。楊柳山頂のブナは花を付けていた。この花を見るのは初めてだった。

子継峠からの長い坂を下り、一本杉でしばし休憩、そこから転軸山に登り返す。山頂でもう16時近くになっていた。短い下りで大師廟の裏に出た。廟は多くの観光客であふれていた。聖地につき立ち入り禁止みたいな場所から我々が現れたのだから、エイリアンを見つけたかのような目で見られた。

せっかくの高野山、うまい胡麻豆腐を買おうということになったが、またまた思い出を作ってしまった。天上から舞い降りた気分の我々だっただけに、あの出来事は、いま思い出しても現世的で可笑しく楽しい。

高野山駅を出たのが 18 時、電車の中でも、鰹節のような形をした大きな硬い飴を金槌でコンコンと叩き割ったりして遊んだ。土佐土産の「松魚つぶ」という飴だ。お大師様も微笑んでくれただろう。

9．H27 サンマパーティ

・実施日　2015 10/23(金)～24(土)
・場　所　いよやかの郷（大阪岸和田市）
・参加者　(19 名)　　〈§：夫婦で参加〉
金岩⑤、篠島⑧、島林⑩、藤井N⑩、畔山§⑪
加藤§⑪、森川⑪、野村⑫、山西⑬、赤地K⑭
宇野§⑮、金井⑮、高村⑮、間所§⑮、三宅⑮

・パーティ報告

雑草園を飛び出しての２年目、昨年の反省から、荷運びや調理の準備、後片付け等から解放されるよう夕食は宿の料理を食べることにした。また、昨年は、ほぼ夕刻集合としたが、前日からログハウス１棟を借りておけば、チェックインの時間と関係なく荷物置き場、活動場所が確保できる。今年は開始時刻を早め戸外料理も楽しめるようにした。部屋は、結果的にログハウス４棟と広めの和室１室を借りた。19 名の参加者でもかなりゆったりできた。労力減、かつ宿泊となると、それなりの会費となる。今年は 15,000 円徴収したが、幸いにも 1,000 円返すことができた。

第１部　ウエルカム焼サンマ

長七輪２個を準備、来た人から順に、炭火焼きサンマとビールを楽しんだ。やはりワンゲルだから戸外で楽しくやれるのがうれしい。間所さんがダッチオーブンで焼きリンゴを作った。やりたい人が露店風にやってくれるとお祭りみたいで楽しいかも知れない。差し入れのカステラ、バウムクーヘンで大中小も楽しんだ。富山の珍しい蒲鉾も食べた。

第２部　夕食

宿屋の「旬のおすすめ会食」とした。宴会用の個室を無料で借りられたが、後の行事のため、ビールで乾杯程度にとどめた。

第３部　お茶会

胡坐流、山鹿流の両宗匠が準備。今年は女子部屋となる広めの和室を確保したので、全員ゆったりと座わってお茶をいただいた。差し入れのさまざまな菓子も堪能できた。

第４部　活動報告

和室にパソコンをセットし、お茶会に続き活動報告会。近畿支部活動 DVD（畔山）の上映、笈岳登行報告（野村）で時間切れとなった。広くても女子部屋では続きができない。そのあたりが今後の課題である。

第５部　入浴・自由時間

24 時まで OK の温泉があり、時間に追われることなくのんびりできた。宴会場をログハウスに移したが、女子も宴会の雰囲気だったので、酒を持ってこられなかったという。

呑んべえには気の毒なことになったが、酔いつぶれた者がいなかったという効用もあったようだ。各棟 2F にはベットがあり、階下で遠慮なしに盛り上ることができたが、酒の切れ目が話しの切れ目となったようだ。

第６部　朝食、後片付け

朝食はバイキング。後片付け、機材の積み込みも意外と早く終了し、10 時過ぎにチェックアウトできた。

第７部　利晶の杜（オプション）

千利休、与謝野晶子記念館である。11 時過ぎに到着。立派な建物の日陰にて、残り物で怪しげな昼食を済ませ入館。立礼茶の体験や茶室を見学し、15 時過ぎに解散した。

（文責　加藤 忠好）

東海支部活動報告　養老山 PW

17 期　渡邉 和文

時：2015 年 9 月 26 日(土)

メンバー：L. 坪井（24 期)、森島(4)、野村(12)、佐野(15)、竹本(21)、渡邉(17)

養老山地は濃尾平野の西側に位置し、北は関ヶ原、南は桑名に接し、屏風のようにそそり立つ。養老山は養老山地の北寄りに位置し、標高 859.3 m。山麓には水が酒に変わる伝説で有名な養老の滝がある。野村さん曰く、「侮ってはいけない山」。

前線が停滞して心配された天候は雲が徐々に切れて晴れてきた。９時３０分、養老鉄道養老駅に集合。野村さんと竹本さんの車に分乗して登山口の養老の滝駐車場に向かう。管理事務所に登山届を提出して 10 時に出発。トップは森島さん。車道を少し歩き、滝の上流を渡り、いきなりの急登を速いペースでぐんぐん高度をかせぐ。樹林の中を喘ぎながらついていくこと 30 分。リーダーの「そろそろ休憩しましょう」の声がかかるも、「この先のベンチまで行こう。あと、２～３曲り」との返事。これを聞いてから何曲りしたであろうか、ようやくベンチに到着。１ピッチ目から 40 分の急登で大汗をかく。現役時代の上級生の「もうちょっとだ」に騙されつつ登ったことが思い出される。

15 分休んで三方山を目指す。20 分余りで三方山に到着。濃尾平野の眺望を楽しむ。眼下を流れる木曽川、長良川、揖斐川や岐阜金華山から名古屋駅の高層ビルまでぐるりと見渡せる。

三方山にて(野村･森島･佐野･渡邉･坪井･竹本)

3 ピッチ目もススキや馬酔木の尾根を快調に進み、最後の階段もクリア。出発から 2 時間の 12 時過ぎに予定通り小倉山山頂に到着。頂上は園地として整備されており、東屋で昼食。メンバー提供のリンゴ、チーズ、ナッツなどで豊かな食事となった。西方に霊仙山が大きな姿を見せる。頂上付近はなだらかで積雪期や視界の悪い時は迷いやすいとのこと。次は目的の養老山。なだらかな稜線の道を進み、20 分で山頂到着。残念ながら周囲は樹林が茂り、眺めは無し。20 分ほど地域参加などの話題で雑談休憩し、引き返す。

養老山山頂にて

東海支部のＰＷについては「下りのペースをゆっくりと」という指摘がされており、今回は着実なペースで下った。登りで休憩したベンチまで行って休憩かと思われたが、その手前 5 分のところで休憩となった。ここまで 45 分。ゆっくりしたペースとはいえ、そろそろ膝がガクガクし始めたところだったのでうれしい。最後の 1 ピッチだが急な下りが続くので慎重に歩く。いよいよ膝はワナワナしだして、滝の上部の沢で休憩をとる。すると、アミノ酸飲料、スプレー式鎮痛消炎剤、けいれんに効くという漢方薬の芍薬まで出てきて、皆さんのしっかりとした装備に感心する。10 分ほど歩いて駐車場に 15 時過ぎ到着。続いて少し下がったところにある養老神社・菊水泉(名水百選)で喉を潤す。ペットボトルに詰めて持ち帰るも酒にはならず。車で 10 kmほど南に行き、「水晶の湯」で汗を流す。養老山地の中腹にあり、露天風呂から濃尾平野の眺めを満喫。ＰＷはここで解散。電車組は駒野駅まで送ってもらって帰路についた。今回もちょっとハードながら、初秋の養老山、眺望、名水、温泉などを楽しめたＰＷでした。なお、このＰＷについては「ノムさんの散歩」も是非御覧ください。

http://nomusanpo.blog64.fc2.com/blog-entry-508.html

関東支部　福島の合津邸を尋ねて

9期　山中 重夫

毎年6月に開かれている関東支部の同窓会の席上で伊豆高原の拙宅、福島にある合津さんの実家（ご両親がなくなられ、農家を合津さんが相続して畑作をしている）を訪問する案が浮上した。

第1弾の8月末に8名で伊豆の拙宅に一泊して天城山に登る計画は、金沢から上馬さん(15期)東海から坪井さん(24期)にも参加いただいたが、オーナーの日頃の行い悪く雨天になり、宴会のみとなってしまった。其処で晴天に恵まれた10月31日、11月1日福島の合津さんの生家を訪ねた時のことを報告させて頂きます。

(参加者)
6期合津(ホスト)、7期四十万、9期山中、
11期青柳、11期長岡、14期清家、17期吉田
18期横井、20期久富、20期松下

金沢から久富さんが鬼怒川水害のボランティアを兼ねて参加し、つくば市在住の長岡さんに常総市に迎えに行ってもらった。他は東京から車2台に分乗し、伊豆高原に続いて7期の四十万さんがハーレーダビットソンで轟音を響かせての参加となった。東京から4時間余り、計画通り、2時過ぎには全員、無事に合津さん宅に到着した。

ここで少し合津さんの豪邸について説明をしておきます。場所は、常磐自動車道を一路北上し途中から磐越自動車道に入りいわき三和インターを降りて、すぐの川のほとりにあります。敷地は凡そ5000㎡（70m×70m）と広大で(実は隣との境界はあいまいらしい)、その中に母屋と別宅の2軒と納屋と畑がある。敷地の一部をゲートボール場として地域に貸されているとのこと。相続後、月のうち6割は東京から高速バスに乗って畑作業をしに来ているとのことです。

集合後、車で20分程度かかるスーパーマルトへ肉や秋刀魚、アルコールの買出しに行く者、庭で釜(つぼの形をした七輪のようなもの)に火をおこす者、芋煮や天ぷらの具材となる野菜を切る者に分かれて準備開始した。合津さんの下準備と適確な指導で、芋煮ができ、長岡さんが天ぷらを揚げ、4時には乾杯となった。釜で焼いた秋刀魚は皮がむけてしまい、見てくれは悪いが、味はまずまずで、ハム、焼き肉のバーベキューと続いて、ビールがすすみ、屋敷が広いので生理現象は、外で可とのオーナーのありがたいご宣託。野外で薪の火を囲んで宴会を十二分に楽しんだ。

(乾杯　後ろは合津家別宅)

(宴もたけなわ)

日もとっぷりと暮れ、第2ラウンドは母屋で青柳さんの設定で映写会。メルヘン漂う青柳さんの野鳥の写真からはじまり、長岡さんが直前、日本山岳会で行ったインドネシアの登山写真、何故か山よりも美女の顔ばかり。ゲストの久富さんからは、倉谷の現況と小屋作業の報告があり、アルピニスト吉田さんのK２登頂やハチンダール・キッシュ峰初登頂のスライドは圧巻でした。夜遅くまで談笑し、日が変わる頃、母屋と別宅に別れ就寝となったが、母屋に残ったものは、それから合津さんによる干し柿用の皮むき講習が行なわれた模様。大分、飲んでいたにもかかわらず合津さんは更に翌朝の朝食の炊き込みご飯を仕込んで就寝したとのことで、山でも下界でも鉄人ぶりを発

揮。お母屋の風呂は、五右衛門風呂とのことで、沸かしてもらっていたのに、入れなかったのは申し訳なく、残念でもあった。

（合津家母屋　築100年の家の内装を一新された）

翌朝は昨夜仕込んで3台の炊飯器で炊き上げた炊き込みご飯とみそ味に仕立てた芋煮で朝食をいただいた。朝食後、合津さんの指示で、一人一株、持って帰る里芋の掘り起こしと柿の木になった実を全てもぎ取る作業を全員でした。先に用意していただいていたジャガイモやカボチャと合わせて全員がお土産に頂いた。

ひとしきり農作業をした後、近くの見晴らしの良い水石山県立公園（標高734m）に合津さんの案内でドライブをしたが、途中の山林も合津さんの所有とか。春には、カタクリの花が咲き乱れるとか。山頂からは、遠く東北の山々が連なり、反対には太平洋が波静かに横たわりその手前に常磐ハワイアンセンターの建物が見える。昨日、ここへ来る途中の高速道路に放射線の測定装置が置かれていたこともあり、海が静かであればあるほど東日本地震の津波が頭をよぎった。その後近くの常福寺という立派なお寺に寄り帰宅の途についた。

松下さん久富さんは、吾妻山に登るとかで長岡さんが送って行きました。（もう一泊、土湯温泉に宿泊したらしい。）

（常福寺　本堂）

最後に、はるばるこの地にお邪魔して、合津さんは北陸新幹線も東海道新幹線も無い時代に良く金沢大学を選択されたことに感心するとともに、貴重な体験をさせて頂きました。有難うございました。

（追伸：　合津さんからのメッセージ）

皆さんご無事で結構でした。天候に恵まれ幸いでした。

カボチャと甘柿には当たりはずれがありますので運勢と諦めて。

さて反省ですが食事当番が不在につき、豚肉・ナメコ・こんにゃく・焼きそば・ギョーザなどイモ鍋の具が残ってました。何を食ったのか？残留品として　ＫＵＷＶ愛唱歌集のＣＤがありました次回に回収してください。

来年の春にカタクリと共に待ってます。

水石山の水石

石上の水が枯れたことがないと

【スキー合宿報告】

老体にムチ打ち　野沢のゲレンデに立つ

9 期　山中 重夫

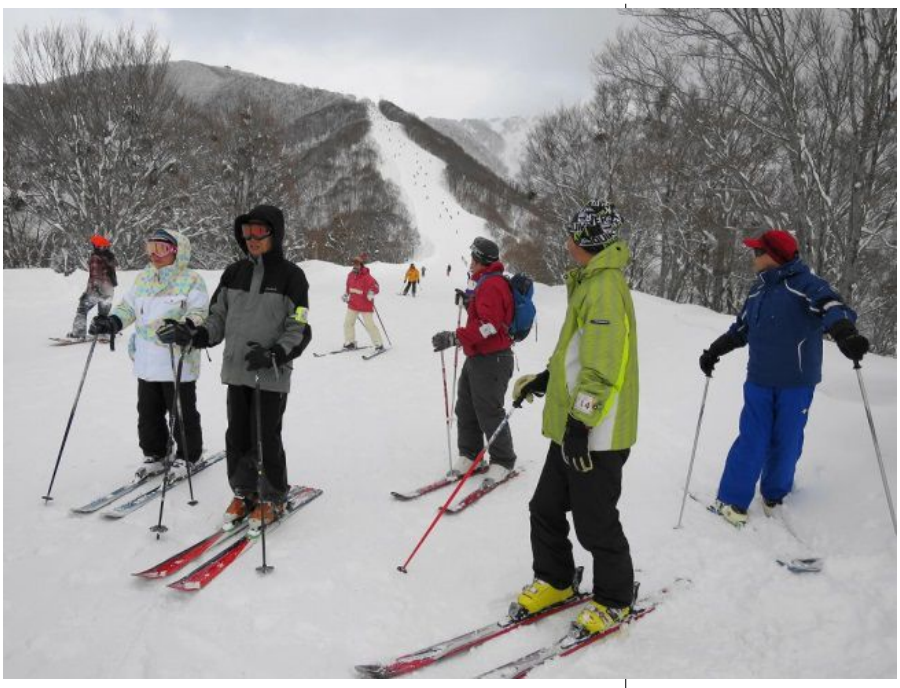
今年も世話役の青柳さんからお誘いのメールを頂き村田さんに続き２番目の参加申し込みとのこと。昨年不参加だったが今年はとの意気込みがあるも最近は歩きすぎるとアキレス拳が痛く医者もスキーはねえ・・といい顔をしない。

２月 13 日、早朝例年の如く青柳さんが我が家まで迎えに来てくれて大名スキーが今年も始まった。本当に青柳さんには感謝、感謝です。昨年は、22 名の参加があつたそうだが、昨年の大雪に懲りたか、今年は 14 名の参加とのこと少し残念。欠席者の中には、長老の田村さんが、眼病を患い参加できず、またワンゲルのスキーのレジェンドともいうべき保田さんがぎっくり腰で急遽不参加とのこと。何とも寂しい限り。

我々は、野沢に近づくと猛烈な雪で視界がすこぶる悪い中今日の滑走の中止も予想しながら宿舎「ふるさと」に着いた。新幹線で来た伊藤君とほぼ同時刻に着いた。暫く談笑していると少し小降りになったので雪の中ゴンドラに乗りやまびこゲレンデに向かった。名古屋から夜行バスの若手(言っても可なりのお年)野村君や金沢からの先発組４人と合流。昼食をとりながら外の様子を見るも天候は回復しないため毛無山は諦め上ノ平を滑り、日影沢のゲレンデで数回滑り早々に中の湯の湯煙へ直行した。齢 70 を前に無理は禁物である。

今日は８名、夕食前に野村君、辰野君が持参した、泡盛の黒糖添えで早くも出来上がり、夕食を終え青柳さんの「明日は昼から。晴れるぞ」とのご宣託を楽しみに床に就く。

１日目の夕食時（撮影：青柳）



2 日目のスキー（撮影：佐藤）

翌朝起きると新雪が 40ｃｍ程度積み上がりゲレンデは 4m以上の積雪とのこと。昨日よりは良いが青柳さんの予言が当たるといいが、取りあえず土曜日で混雑のゴンドラで出発する。昨日の滑り足らない欲求不満からか早々に毛無山に向かってリフトに乗り、やまびこゲレンデを滑走した。野村教授の定年退官の最終講義で一日遅れとのことで金沢より参加の佐藤、野村孝、村田女史のご長老 3 人の到着。退官記念講演の興奮が冷めやらないのか野村さんは、いきなり上級のスカイラインコースを滑降されていた。昼食を上ノ平ゲレンデの食堂でとった。各地から集まった全員 14 名が合流した。時間指定で現地集合が難なく出来るのも歴史のなせる業か。やっと青空も顔を見せ各人が、思い思いのコースに、私と伊藤君は、混雑しない内にスカイラインコースを降りる。今年は最後まで、年齢に相応しい優雅なスキーを心がけるとしよう。

全員揃った夕食、そして恒例のお茶会、スライドを含めた近況報告と続くゴールデンタイム。まずは、佐藤さんの白山 100 回登山の記録。データに基づく工学部教授らしい話に続き、上馬君の「カムチャッカツアー」の報告。これは、ワンゲルＯＢを中心に私が企画したツアーであるが、カムチャッカの地形の特徴から始まり、論理的に説明され、私が気づかなかった風景もあり考察の深さを感じるスライドあった。そして野村孝さんの退官公演の話、わさびの成分が癌に効く話、アメリカ留学中の苦労話、そして欠席の田村先輩のライフワークであるリーマン予想の骨子を田村さんの愛弟子の松下君が解説や 70 歳を超え新たに大学院で研究する村田女史のお話など同じ大学を出たとはとても思えないアカデミックなひと時であった。最後に舟田さんの篠笛演奏がありお開きとなった。

翌日は、スキーに行く人、買い物に行く人など来年の再会を誓いそれぞれに散った。

私はスキーをして青柳さんと帰る予定であったが、アキレス拳が痛み医者の言葉が頭をよぎり、伊藤君と新幹線で帰ることにした。時間待ちで宿舎「ふるさと」で待っていると 10 数名のオーストラリア人が泊まっていることがわかり、年々スキー場が国際化していることが、ひしひしと実感できた。帰りは長野行のバスに乗ったが途中飯山ではどでかい開業ま近の新幹線の駅が雪のなか現れ、長野では北陸新幹線の試乗会の人々であふれていた。

また余談であるが、金沢をテーマにした村松友視「金沢の不思議」、五木寛之の小説二点などの本が新幹線の開業に合わせて発売されていることを知り、商魂のたくましさに驚かされるとともに、久しぶりに我が金沢が注目を浴びる予感がする年になりそうだ。

（参加者）

④佐藤 ⑦村田 ⑧野村 ⑨伊藤・山中
⑪青柳・上村・片田 ⑫野村
⑬山西・辰野 ⑮上馬・舟田 ⑳松下

（〇は期）

11 期会（いちごの会）2015 年 活動報告

11 期　井上 史三

＊「やまざと」前号で触れているが 11 期会は一文字ずらすと一期一会・・・そこでいちごの会と命名・・・

一昨年の能登島に続き、昨年の明治村で毎年この会を実施しようと決めた経緯があり、今年度 2015 年は北陸支部が担当し、春の部（6 月 10 日～13 日　in　立山）と秋の部（10 月 18 日・19 日 in　戸隠）と 2 回実施した。

その①　春の部(6 月 10 日～13 日)

立山弥陀ヶ原ホテル 2 連泊（立山駅から黒部湖間のケーブル、高原バス、トロリーバス乗り放題チケット付きの格安プラン）と 3000m級の春山ワンデリング PW である。（例年ならば 5 月実施というところだが、今年は北陸新幹線開通とあって 5 月はホテル満杯で断念、6 月の実施となった）

参加者は畔山夫妻、片田、加藤夫妻、上村、井上 2 名の 8 名。

1 日目（6 月 11 日）　前日の 6 月 10 日は立山山麓粟巣野ＫＡＫＩゲストハウス（木村大作監督の映画「春を背負って」の舞台ともなった）に泊まり、翌 11 日は立山駅からケーブルカーで美女平、そこから高原バスで弥陀ヶ原ホテルに、身支度もそこそこにまたバスで室堂まで。室堂平では全員アイゼンを装着後、今回の最高峰　室堂山 2668mを目指す。

（室堂山中腹）

最高峰（？）を窮めたのち、前方に剱岳を見ながら下山。残念なのは晴れていれば見えるはずの槍穂、白山などが見えなかったことである。

（シラネアオイの群落）

2 日目（6 月 12 日）　雨のためトロリーバス、ロープウェイ、ケーブルを乗り継ぎ黒部湖まで足を伸ばす。ダムの放水にはまだ少し早い時期であったがレストハウス２階で映画「黒部の太陽」に繋がる関西電力のダム建設当時のフィルムを見る。帰途黒部平では雨中にシラネアオイの群落に歓声を上げ、室堂から 20 分の距離にある日本一高所の天然温泉と言われているみくりが池温泉に入る。時間切れで名物のシロエビ丼が食べられなかった事が残念と言えば残念。この日もフリーチケットで弥陀ヶ原ホテルへ帰着。夕食時、食堂から夕日や富山平野の夜景を楽しむ。

3 日目（6 月 13 日）　最終日は晴れ。今回 2 度目の黒部平にて加藤宗匠代理のお点前を頂戴する予定が何故か白湯を頂く結果となる。理由は未だもって霧の中・・・。皆失意（？）のうち室堂平に戻り、雪の大谷の下部あたりより雪上に出る。観光客もいなく天狗平まで我々だけの雪上ワンデリングを思う存分楽しむ。

（天狗平にて）

今年は６月の割には雪も多く、雪の大谷はまだ16mの大雪壁であった。そして全員で尻セードに大はしゃぎ、童心にも還れた山行きであった。何故か初心者の畔山知栄子さんがスピードもあり一番上手かった・・・。

その②　秋の部（10 月 18 ・ 19 日）

秋は戸隠連山登山（果たして誰が？）と戸隠奥社、鏡池の紅葉を楽しむ会を企画。

参加者は青柳、畔山、加藤夫妻、上村、北川、窪田、杉森、高田、森川、向夫妻、井上２名の 14 名。

今回特筆すべきことは、向幸子さんご主人の沖継さんの肝いりでこの企画運営が行われたことであった。

１日目（10 月 18 日）は、向沖継さんの運転で８名が金沢から、北川が上越妙高からこれに合流後野尻湖で遊覧船に乗り、柏原に小林一茶旧居を訪ね夕刻戸隠越水が原「森の宿めるへん」着。名古屋組３名（窪田、杉森、森川）が別所温泉の寺々を巡り善光寺経由で宿まで、さらに遠路はるばる四国よりの高田、さいたまから青柳がそれぞれ集う。

夫婦二人で経営するペンションの地産地消の夕食は美味しくお酒もよく進み、食後は畔山監督による２０１５春の部ＤＶＤの観賞、談論風発の中、森川宗匠のお点前で戸隠大茶会となった。

２日目（10 月 19 日）は、素晴らしい秋晴れの下、13 名が戸隠奥社では樹齢 400 年の杉木立の社叢を歩き、桂の甘い香りを楽しんだ。遊歩道を行きついた鏡池では紅葉の映る池越しに峩々たる戸隠連山山容にM氏（後述）の行程をダブらせた。お昼は奥社参道手前のソバ屋さんで名物そばを食し、その後解散。

11 期でおそらく唯一人、往時と同じ健脚を誇る森川はひとり早朝6:30 におにぎりを携え難所「アリの門渡り」、「八方睨み」と連山走破に出発。昼食のソバは食べ損ねたけれど無事窪田号に合流し、畔山と名古屋組３名で帰路に着く。青柳、北川の両名はそこから麻績、翌日小渕沢へと足を伸ばし、今回参加できなかった芝田氏宅を訪問。話が弾むうちに来年開催地の好感触を得た。上村は高田号に同乗し、思い思いそれぞれの帰路に着いた。

秋の戸隠は紅葉も素晴らしくまた天候にも恵まれ、参加者一同今回の企画者兼ツアーコンダクターに感謝の２日間であった・・・。

（森の宿めるへん前にて）

（鏡池畔）

ＰＳ　（2015 の会を終えて・・・）

折しも今年のノーベル生理学・医学賞受賞の大村智教授の母校での講演メッセージは

「一期一会、人との出会いを大切にすること・・・」

それに思いを深くした旅であった。

KUWV13 期“まれの里能登”を訪ねて

13 期　大島 良治

13 期会の会員は現在 17 名です。

平成 5 年より毎年同期会を開催しており、今年で 23 回目です。今回は、大島が幹事を引きうけ、東京組 2 名、名古屋組 5 名、地元組 5 名の計 12 名の参加者で、1 泊 2 日（10/17, 18）の楽しい旅行をしてきました。

1 日目：能登里山海道高松 PA 集合（10：00）→別所岳 SA で穴水湾を展望台より満喫→SA を出て道路を走っていると“まれのﾃｰﾏｿﾝｸﾞ”が聞こえてきます→総持寺→猿山灯台→間垣の里大沢地区（まれでの外浦村役場）→能登の外海海岸をドライブ→旧輪島駅→民宿“まん月”で宿泊

2 日目：輪島朝市見学→キリコ会館見学→漆器会館→千枚田→“まれの桶作の塩田”→道の駅狼煙で昼食→狼煙禄剛崎灯台散策→軍艦島→能登空港で解散（16：00）

感激、感動した場所を以下記します。

① 猿山灯台；ワンゲルに入部した夏ごろに“舳倉島 PW”に参加した折、輪島に 1 泊後猿山灯台まで随分と長く歩き大変な行軍だったような記憶があり、とても懐かしかったです。今の灯台は建て替えられ、電波灯台との事です。

② 間垣の里大沢地区；まれの撮影に使用したと思われる、“外浦村役場前”のﾊﾞｽ停と小学生のまれが　将来の夫“圭太”と遊んだ丸太組みのｽﾃｰｼﾞがありました。ﾊﾞｽ停は本物と同じ（よく見るとベニヤ製でした）で外浦村役場が本当は実在しているのかと全員勘違いしました。又、ｽﾃｰｼﾞは“危険ですので登らないで”の注意書きを輪島市が設置してありました。

③ 旧輪島駅；昔の駅の看板に輪島の次の駅は“シベリア”となっていました。（本当にそうだったようです）

④ 輪島朝市；大勢の人が集まっており、おばさんたちは上手に買い物客を接待しており、田舎のおばさんとは思えませんでした。商売上手なおばさんばかりで思わず買わずにはおれない状況です。

⑤ キリコ会館；能登ｷﾘｺは本当に大きく立派でした。館内で上映されている祭りの映画を見ているとなぜか血が沸きったって来るようでした。みんな興奮していたようです。

⑥ 漆器会館；会費より輪島塗の箸を買う費用￥3000を各人に出費。女性陣は箸より輪島塗のﾌﾞﾛｰﾁに心が傾いている模様。買い物時間30分の予定が1時間を超える程人気がありました。

⑦ ”桶作の塩田“；現地では実演（本当はお仕事）もあり、塩造りは大変重労働であると実感しました。まれのお陰で現在能登の塩は売れ過ぎて一人一袋しか買えない位に貴重品だそうです。海の水を桶に汲む場所も見せてもらうが、すごく綺麗な海辺でした。

⑧ 禄剛崎灯台；明治時代のｲｷﾞﾘｽ人が設計した灯台だそうです。道の駅からの灯台までの道は、メタボの人にはやや厳しい上り坂です。私は大変でしたので、もういきません。

⑨ 軍艦島；世界遺産の軍艦島ではありません。能登にも軍艦のような島があるのです。

⑩ 能登空港；石川県には空港が2か所あります。小松と能登空港です。能登⇔羽田の2便/日あり、運賃は県、地元市町村よりの補助でやや格安となっております。県民でなくてもその恩恵が受けれます。こぞって能登に来てください。

2日間がｱｯという間に過ぎました。楽しい時間は早く過ぎ、苦しい時の時間は遅くなるのは本当ですね。

23回もやっていると、中部地区では行くところがなくなり、来年はとうとう九州博多集合となりました。熊本出身の島崎さんが幹事です。
きっと、島原、普賢岳、ｸﾞﾗﾊﾞｰ邸、噴火中の阿蘇山、別府温泉、友達が沢山いる高崎山へ行くのでしょう。今から楽しみです。

13期会は、卒業後誰一人かけることなく皆元気でいることが自慢なのです。もう、65歳を通り過ぎもうすぐ後期高齢者の仲間入りとなります。

先日の話ですが、ｲﾝﾌﾙｴﾝｻﾞの注射がお年寄り料金の￥1000で出来たと喜んでいる会員も居る始末です。

いつまでも元気で100歳まで13期会を維持できればと意気込んでおります。

15 期同期会　上越のお酒を堪能する旅

15 期　舟田 節子(報告役)

参加者　上馬 2、宇野 2、奥名、坂尻２、佐野、鈴木、祖父江、高村、舟田、増田、松林、間所2、三宅2、松縄　計 20 名

＊ 松縄 幹事より

9 月 15 日

各位、ご案内が遅れて申し訳ありません。田舎に帰り、詰めるべきところを詰めてきました。

次の行程とします。

10 月 11 日(日)

12 時 10 分、北陸新幹線上越妙高駅東口ロータリーに集合。12 時 25 分「フラット号」シャトルバスにて上杉謙信、春日山城にて下車。山城の頂上まで散策。城はありません。

下山して上杉謙信が修学した「林泉寺」を見学。

15 時 30 分、林泉寺前駐車場に集合。

鵜の浜温泉「三景」差し回しのマイクロバスにて宿屋へ。

16 時 00 分、宿に到着。

上記行程を経ずに宿に直行も可能。宿には部屋割りを事前に連絡しておきます。各自入浴、自由時間。

17 時 30 分、宴会開始。

10 月 12 日

7 時 00 分、地曳網見学に砂浜に向かう。

魚が取れたら配分されます。不漁もあるのであまり期待をしないでください。

9 時 15 分、宿のマイクロバスで宿を出発。

9 時 40 分、上越酒造　酒蔵見学。

「越後美人」などを醸造。蔵のご当主で杜氏でもある高校先輩、飯野社長自ら説明。試飲無制限。

10 時 30 分、宿のマイクロで蔵元を出発。

10 時 35 分、岩の原ぶどう園到着。

ここで宿のバスは旅館に戻ります。ぶどう園見学とワインの試飲。(好きなだけ試飲可能)

高級なワインの試飲は、ちゃんとしたガイド嬢が説明しますので、実費がかかります。

11 時 25 分、昼食を予約している「深山荘」から迎えのマイクロバスが岩の原ぶどう園駐車場に到着。乗車。

途中、頸城平野越しの妙高・火打・焼山が遠望できるかと思います。

11 時 50 分、「深山荘」到着。

昼食と希望者は入湯できます。(料金は食費に入ってます)

13 時 20 分、深山荘を深山荘のマイクロバスで出発。14 時 00 分、上越妙高駅到着、解散。

行程は若干時間の変更あります。

予算一人 2 万 8 千円です。(シャトルバス代と林泉寺見学で千円余り別途負担あります)。上越のお酒を堪能していただくために、できるだけ電車をご利用ください。

参加の可否、並びに男女別人数と高田までの交通手段、シャトルバス乗車で春日山城見学か、宿に直行かをご連絡ください。参加費は余ったら次回に回します。お魚はクーラーボックス持参で持ち帰れますが、帰宅までの途中時間が長すぎるかもしれません。ここが悩ましいところでした。ぜひ、上越のお酒を召し上がっていってください。連絡をお待ちしています。

＊ 金井 澄より

9 月 16 日

15 期の有志の皆さんへ

三宅夫妻からお奨めの妙高の山中の「燕ハイランドロッジ」を翌日の 12 日にツイン 2 室分(4 名分) を既に予約しています。アクセスは佐野氏の車で、12 日の「深山荘」の昼食解散後に石田のふるさと安塚を訪れたあと宿へ直行する予定です。帰りは小諸などへ寄るかもしれません。適当な所で解散です。詳細は参加者で決めるつもりです。あと二人参加できますが、どなたかご希望の方はカナイまでご連絡下さい。なお、「燕ハイランドロッジ」はブナの森の一軒宿で三大美人泉質(おっさんには関係ないか？)で2 食込で@11500 円です。

9 月 17 日

お知らせです。10 月の 15 期会のあと、妙高の燕温泉と小諸をまわるオプショルツアーは即日満員となり締切りました。佐野、奥名、宇野夫妻、金井の 5 名です。

ブナの紅葉を愛で、三大美人泉質で肌を磨いてきます。13 日には、小諸の石田の墓参りをしてきます。

＊ 坂尻 忠秀より
10 月 6 日
松縄 幹事　様
予定どおりに参加します。よろしくお願いします。天気予報が若干気がかりですが、楽しみにしています。
12 日は帰り金沢から穴水までの運転があるので、幹事さんの「呑んべい」プランにいつまで、どれくらいお付き合いできるか悩んでいます。何かいい方法を教えてください。

＊ 間所 新一より
11 月 12 日
松縄 幹事長、皆さんへ。
細やかな配慮で楽しい二日間でした。ありがとうございました。
久しぶりにたっぷりお酒も飲めたし、つべつべの温泉とたっぷりの料理も良かったです。
取り敢えずスマホで撮った写真を速報します。2 枚目の写真は富士山ではありません。朝の散歩時のみんなの陰です。
それではまた来年を楽しみにしています。
奥名　よろしく。

＊ 松林 知一より
10 月 12 日
松縄　さま
本日 17 時に無事帰宅しました。楽しい時間を本当にありがとうございました。
おかげさまで、以前から気になっていた春日山にも登ることができました。お酒もワインも料理も温泉も大満足です。
貴兄の細やかな、行き届いた普段の仕事ぶりを垣間見た思いです。一年がかりのお世話に重ねて感謝申し上げます。
取り急ぎ、お礼と無事帰宅のご報告まで。

＊ 増田 富雄より
10 月 13 日
楽しい同期会ありがとう！全員みんなみんなに感謝です。
帰ってからは、今までの生活とは大きく変わります。（仕事に追われない生活）
みんなに刺激を受けつつ、また来年を楽しみに!!

＊ 高村 千佳子より
10 月 13 日
松縄　さま、みなさん
こんばんは！　たかむらです。
松縄さん幹事お疲れさまです。
細やかな行き届いた計画・企画見事ですね。お陰さまで楽しいひとときを過ごせました。毎回、いつも素晴らしい企画で感動させられます。15 期会のＨＰみたいので、残していけたらいいですね。
帰りは、金沢から自由席で心配しましたが、座って無事 9 時前に帰宅しました。
京都まで立っている方が、大勢いました。拙い写真ですが、添付します。
またお会いする日を楽しみにしています。
ありがとうございます。

＊ 宇野 潔より
10 月 14 日
各位
松縄君のおかげで、今年も楽しい時を過ごすことが出来ました。仲間がそれぞれの環境で、頑張っているのを確認する大事な時間です。集合写真を中心に写真をお送りします。
後半に、高田高校の体育館に忍び込んで撮影した校歌の額、オプションの燕温泉（妙高山の登山口）の「10 円露天風呂」と三宅君お勧めの「妙高ハイランドロッジ」、そして、主目的の石田の墓参りの後に澄恵さんに案内してもらった小諸動物園の写真をお送りします。
比田井宅では、学生時代そのままの石田の写真が桟に架けられていて、胸にこみ上げるものが有りました。亡くなってちょうど２５年の歳月が流れたのです。
澄恵さんは、お元気で、心からのもてなしをして頂きました。奥名と僕は、ロング缶３本と日本酒をいただいて・・・・。
・・・・と、いうわけで写真を見てください。

＊ 三宅 毅より

10 月 15 日

松縄さん、みなさん

松縄さん、お疲れさまでした。さすが長年の総務部長ですね。細かい気配りに感謝してます。二日目の上越酒造、岩原ワインでの皆さんの飲みっぷりを見ていて羨ましかったです。その分、旅館で飲み過ぎました。

新潟県から群馬県に入ると晴天で驚きました。谷川岳から草津温泉、白根山から志賀高原をドライブして昨日帰りました。全行程１３５０キロでした。志賀高原の紅葉は丁度ピークで素晴らしい景色でした。

また来年、皆さんに会えるのを楽しみにすごします。

＊ 松縄 宏より

10 月 15 日

各位

今回の旅行は、いかがでしたでしょうか?

上越のおいしい魚とお酒をテーマにしましたが、満足されましたか?

自分ではいろいろ工夫してみたものの、気付かない所で不十分なことも有ったこと、お許しください。

写真と会計報告を添付したのでご確認ください。会計については、幹事一任とさせて頂きたく、よろしくお願いいたします。

来年、幹事の金沢の方々気楽な旅を作ってください。

またお会いできる日を楽しみにしています。

＊ 金井 澄より

11 月 15 日

松縄 幹事長＆皆様へ

上越のおいしい魚とお酒、堪能させていただきました。ありがとうございます。その上に、まだ返金があるとかで驚きです。会社が手放さないハズの名総務部長です。

ところで、私の方は一昨日の午後 11 時ころにようやく我が家へたどり着き、昨日は疲れをとるのに家でボンヤリしてました。皆さんと上越妙高駅で別れたのち、佐野車で宇野夫妻、奥名、金井の 5 名で燕温泉へ。三宅お奨めの宿で紅葉とうまいメシと美人の湯を楽しみました。皆さんも機会があればぜひどうぞ。お奨めです。（ただし、部屋は洋室ツインに限ります。和室はお奨めできません。カメムシと〇〇コオロギがいますので）

翌 13 日の小諸では、比田井さん（石田の奥さん）宅で手料理の煮込み、サラダなどのもてなしを受け、宇野・奥名は遠慮なくビールと日本酒をしこたま??飲んで・・・。その上、当地のお菓子や野沢菜の手土産までいただきました。

今は、奥さんは猫 2 匹と暮らしておられました。教師は数年前に定年となり、週 1 回の福祉ボランティアに行くほかプールで 500m 泳ぐ日々だそうです。時おり近くの山なども歩いているとのことでした。

3 人のこどもは家を出て、それぞれの仕事に頑張っておられるようです。なかでも俳優をしている長男が今春に結婚され、その嫁さんは兵庫県加西市出身のモデルさんです。明治神宮での結婚式の写真も拝見しましたが、まさに美男美女のカップルでした。

小諸ではご自宅や墓まいり、懐古園と 4 時間近く共にいたので、奥さんとたくさんの話をしました。高田高校のこともワンゲルのことも。彼・石田忠篤は、「学びの友垣一千余」の高田高校でも特に優秀な成績だったようです。もっと上をめざせると周囲の期待もあったのに、あえて金沢大学に憧れて入学したとのことでした。そこで出会った友人達を何より誇りに思っていたとのことです。

軽トラを奥さんが運転しての初デートして以来、亡くなるまで高田と金沢の話は彼からよく聞かされたらしいです。そして 40 歳に届かずして亡くなる前も「自分自身の人生には悔いはない。ただ、幼いこどもたち 3 人をお前に託して苦労かけると思うとほんとうに申し訳ない。」と言い残して逝ったとのことです。27 回忌を前にして初めて語れる心境かもしれませんが、奥さんは「忠篤は立派な人だ。その思いは今も変わらない。」とキッパリ断言されました。（ウチの嫁はんはそういうことは思ってもいないやろナァ。貴兄のところはどうですか?）15 期会にも機会を見つけて参加できればとの思いも伺いました。来年、金沢で皆さんとお会いできるかもしれません。そのあたりは、アルコールを一番飲んだ奥名次期幹事長の

采配いかんです。乞、ご期待。

小諸を後に、和田峠を抜け、諏訪へ。諏訪下社秋宮へ参拝。私は、負け続けの競馬、なかでも秋のＧ１シリーズの必勝祈願をひたすらしてきました。岡谷ＩＣから一路、名古屋へ。ただ土岐付近で渋滞に引っ掛かり。やむなく多治見からＪＲに乗り換え、名古屋経由で新大阪へ。充実して濃い3日間でした。

皆さん、ありがとうございました。とりわけ、松縄 幹事長と佐野ドライバーに多謝。

＊ 佐野 哲雄より

10月16日

松縄 幹事長　殿

着想の妙、周到な準備　さすがでした。

お土産に買った「越後美人」も高評価でした。

皆さんを見送ってから案内いただいた高田高校や雁木のある町並みなど、貴兄のふるさとを感じることが出来、感慨深いものがありました。

オプショナルツアーについては、金井さんの詳しいメールのとおりです。

皆さんに感謝です。ありがとうございました。

＊ 舟田 節子のまとめ

今回は、みなさんのメールをピックアップし、総出演に近い形にしました。

一人幹事の松縄さん、故郷に下見を重ね、さらには、前泊・後泊付きという意気込み。春日山にも前日、下見登り（もしかして草刈りも？）をされていたとのことです。

そのうえ、無料試飲付きの店を選んであり（もちろん、店の思惑通り、皆さんは、土産酒を購入していましたが）、きわめつきは、移動マイクロバスとして、宿の車、昼食場所の車を、手配してあり、（図々しく）観光地を含めて無料移動できたこと。

さらにさらに、「地引網が中止になったんだから、名物スイーツの分の経費が出るんじゃない？」とのおねだりに対し、「もともと、観光地引網は無料なんです。だから経費が浮く・・・にはならないんです！」とのことでした。

凄腕総務部長は、盛りだくさんの企画を、なんと、「無料」のハシゴで埋めていたのでした。よって、最終会計報告によれば、女性には計６５００円の返金という、何よりのお土産付きで、締めとなったのです。

「来年も」「いや、万年幹事でも歓迎」の続投を望む声多数でしたが、来年度は奥名 幹事による金沢編と決まりました。

いよいよ平均64歳となり、終盤の移動がいろいろありそうです。いち早くリタイアされた方々は、ワンゲル育ちを生かして、上手に遊んでいるようです。

「そこそこに死なんと、香典出すばっかりや。最後になったら、もらえんがになるぞ！」と、こんなことまで、酒の肴にしている仲間達と、来年も元気に再会したいです。

宿の『三景』にて

23 期同期会　於金沢

23 期　名倉 均

23 期は卒業後、4 チーム（関西組、愛知組、富山組、石川組）が持ち回り方式で、同期会を開催しており、昨年までに計 6 回開催してきました。

1 回目：越前海岸（関西組）
2 回目：五箇山　（富山組）
3 回目：金沢　　（石川組）
4 回目：小牧　　（愛知組）
5 回目：長浜　　（関西組）
6 回目：高岡　　（富山組）

前回の 6 回目（2 年前に開催）は、

参加者　竹内、小久保、村井、名倉、興井、宮西、窪川、宇野、磯部、戸水、中川、鳥越、坪井（24 期）

2013 年 8 月 24 日
高岡山瑞龍寺→金屋町で鋳物体験→伏木勝興寺
→海王丸パーク→雨晴海岸
→氷見民宿「磯波風（いそっぷ）」

翌 8 月 25 日
大境洞窟→阿尾城址→光禅寺（藤子 A さん生家）
→鮨どころ「きよ水」→氷見市博物館
→柳田布尾山古墳

---

7 回目の今回は旬の北陸新幹線ブームに便乗して、金沢で開催しました。

参加者　山口克己（21 期）、小林（22 期）、黒崎（22 期）、山崎（22 期）、竹内、小久保、磯部、興井、宮西、石地、高橋、宇野、戸水、中川、鳥越、名倉均、名倉雅子

2015 年 11 月 7 日
金沢駅→金沢城公園→ひがしの茶屋街
→観音坂いちえ→松魚亭→あかつき屋（宿泊所）
→銭湯みろく温泉

翌 11 月 8 日
石川県立歴史博物館→金沢大学 WV 部室
→第 7 餃子→鈴木大拙館

関西組の 2 名は、13 時の金沢駅集合前に北陸新幹線を初体験するためだけに「つるぎ」で新高岡までの間を往復してきましたが、集合場所で発した開口一番は、「車中のトイレがウォッシュレットなのにはビックリした！」でした。

車 3 台に分乗し金沢駅を出発し、金沢市市役所の地下駐車場に車を止めて、金沢城公園に入り、玉泉院丸庭園→橋爪門続櫓→河北門→旧部室のあたり→石川門を散策してきました。

旧部室あたりには昔の面影はなく、かろうじて白鳥路に降りる崖や樹木を見ながら、「きっとここらへんだったはずや！」と各自好き勝手な思いを巡らしていました。

幸いにも石川門は、土日と祝日には門の建物中に入れるようになっており（無料で）、その昔何度となく潜り抜けていた石川門や兼六園を見下ろす目線での光景を味わうことができました。

雪や桜の季節になれば、石川門を見下ろす景色は、さらにいっそう素敵に映ると思います。

1．建物の中から見下ろした石川門

いったん宿泊場所の「あかつき屋」に移動して各自の荷物を預けた後、そこから徒歩で 15 分の「ひがしの茶屋街」まで皆で移動。

金沢では、JCI 世界会議が開催されていたこともあり、茶屋街には欧米系の外国人や貸着物をきた若い女性があふれていました。

そこでは、国指定重要文化財の「志摩」に入館。「志摩」は 1820 年に建てられたお茶屋で、これまで手を加えることなく唯一江戸時代そのままに残っている建物です。

解説員の方がおり、5 分程で当時の芸妓の多彩な芸と旦那衆の粋な遊びを説明してくれました。

解説中、我々のお行儀がよかったせいか、解説員の方は唯一の女性である高橋さんに、三味線の弾き方や、太鼓の叩き方を親切に教えてくれました。

http://www.ochaya-shima.com/shima/shima_f.html

その時の音色は外にも流れ、外人の団体さん30名程が、我も我もと「志摩」に入館してきました。即興芸妓の高橋さんが奏でる音色につられ･･･

2．「志摩」で太鼓を奏でる芸妓高橋

茶屋街をあとにし、徒歩で22期の黒崎さんが開業している「観音坂いちえ」に。

ここは、大正9（1920）年建築の町家を自宅兼カフェに改装した金沢の黒瓦の屋根が続く景観を楽しめる隠れ家的カフェ。ジャズの音色が静かに響く中ゆっくりとティータイムを過ごせます。

また、窓からは金沢市内から遠くの山々まで一望でき、春は桜、夏は観音院の四万六千日法要、秋はもみじの紅葉、冬は雪景色と四季おりおりの様相で素敵な時間を過ごせます。

但し営業日は限られているので、HP（以下）で確認してから立ち寄ることが必要です。

http://www.ichie.server-shared.com/kannonzaka/

宴会は「観音坂いちえ」から徒歩3分のところにある「松魚亭」で。

幸いにも前日6日は蟹の解禁日だったので、各自1杯の香箱ガニが出たりして食通の方にも十分に満足して頂けたようです。

3．松魚亭

「松魚亭」の送迎バスで宿泊所の「あかつき屋」に移動。

この「あかつき屋」は、5年前、築80年の金沢の町屋を素泊まりのゲストハウスとして生まれ変わらせた宿で、平成24年にはゲストハウスとして北陸では初めて国登録有形文化財に指定されています。

値段は、全室貸切りで2万6千円（11名宿泊）。持ち込みのお酒を飲みつつ深夜まで熱い話を交わすことができ、皆さん十分にご満足！

また2次会前には、近くの「みろく温泉」にいき、1日目のお疲れを取ることもできました。

http://www.akatsukiya.jp/

4．あかつき屋

2日目は「石川県立歴史博物館」の後、現役の方3名（梅田くん、池田くん、堀田さん）の案内で、角間の金沢大学にある部室を見学しました。

部室は文化系と運動系問わず、1棟の鉄筋コンクリートの建物に集約されており、ワンゲルの小汚いバラック小屋の昔の面影は一切なし。部室はオリエンテーリング部と共用で、テントなどの道具類は、部屋の隣にある倉庫に、綺麗に整理し収納されていました。

昨今の山行記録は、パソコンで作成し電子化して管理されているとのことでしたが、我々の時代の古い記録もロッカーに収納されており、その中には昔懐かしい筆跡での記録も多々あり、それを見ながらの昔話で、非常に盛り上がりました。

① 雪山の稜線での強風でテントがぶっ飛んだので、雪洞を作り2日間ビバークしたこと

② 雪庇にはまって200m滑落しそうなところ、

③　辛うじてなんとか拾い上げてもらったこと
④　ペミカンを温かい所に置いためにに酸っぱくなっていたけども空腹で残さず食べたことなどなど･･･

5．金沢大学の WV 部室

部室をあとにし、ケンミンショーで放映された結果、全国的な人気店となった第７餃子に。

１時間待ちはザラで、放映後は３時間待ちもあり、昔のように気軽には立ち寄れなくなっています。

今回は事前に座敷を予約していたため、すぐに座れて、入店わずか 15 分後にはあの懐かしいホワイト餃子に遭遇できました。

ただ、歳のせいで味覚が変わったのか、昔と異なる IH で調理しているために加熱が変わったか、昔のように噛むとアツアツのジューシー感はなくなっているとの意見がチラホラありました。
猫舌の自分には、ちょうどよかったですが･･･

6．第７餃子のホワイト餃子

第７餃子で一旦解散としましたが、まだ時間のある人だけが「鈴木大拙館」に向かいました。
他の博物館とはかなり異なるコンセプトで建てられており、見てきた方の感想は、「いい感じの他とは異なる博物館ですね。ああいうやり方もあるのだということでしょうか。」とのことでした。

http://www.kanazawa-museum.jp/daisetz/

最後に 21 期の山口さんより「2 年後に、同期が還暦になるので、それを祝して金沢で 21 期の同期会を開催する」との話があったので、2 年後、我々23 期もそれに便乗する予定です。
また、4 年後、23 期が還暦となるときには、関西組主催で、優雅に京都で開催することを予定していますので、もしご都合の宜しい方がいらっしゃればふるってご参加ください。

（幹事：23 期の石地、宮西、興井、高橋）

現在の部室

7．外から見た部室建物

8．中から見た部室建物

9．装備が入っている WV 倉庫

主将あいさつ

59 期　山路 遼太郎

こんにちは。今年部長を引き継がせていただくことになりました、59 期の山路遼太郎と申します。自分のような者に部長という役職が務まるか不安がありますが一年間無い知恵を絞って頑張ります。

今年は１回生７名と３回生の編入生２名、２回生１名と全 10 名の新入部員を迎えられました。一人の２回生として、彼らの入部をとても嬉しく感じました。彼らの中には登山の技術・知識、経験に富んだ部員たちもおり、登山中や部活の集まりの際に色々な話を聞かせてもらったり助けてもらったりしています。ほかの皆も個性に富んだメンバーで部活の雰囲気を良いものにしてくれています。

話は変わりますが、去年は１回生として先輩の後ろをついていく立場だった私ですが、時は過ぎ、２回生として、先輩として皆を引っ張っていかなければならない立場になりました。まして３回生の先輩方が夏合宿を完遂されて引退されてしまい、活動中の現役の中では最高学年という立場になりました。実際２回生として今年のトレーニング山行やＰＷでリーダーをさせてもらうことが何度かありました。いざリーダーをやってみるとリーダーのやらなければならない事の多さやそれらが簡単にできないことが実感できました。自分がリーダーをやった山行中に悪天候やメンバーのコンディション不良などのアクシデントをいくつか経験し、その度、決して軽くない判断を迅速に下す必要に追われました。それに限らずリーダーはそれらアクシデントが起こった時などの色々な山行に悪影響をもたらしうる要素を考慮したうえで行程を考えなければなりません。今年の夏合宿では数人のパーティーメンバーが足を痛め、彼らの荷物を３回生の先輩が自分たちの荷物と一緒に運んでいました。自分は筋肉など総合的な体力が乏しく、先輩方と同じことをできるかと問われたら疑わしい。上回生として山行中の判断や行程を決める際において必要とされる知力や登山の技術、基礎的な体力など、さまざまなものを身につけなければなりません。それらを十分なレベルまで引き上げ、来年の夏合宿、トレーニング山行などで皆の頼りになる３回生になれるよう、努力していきたいです。

2015 年度夏合宿報告

５パーティー、行先は北アルプス、南アルプス、東北、八ヶ岳、尾瀬です。

日程は八月の上旬から下旬にかけて、各パーティー１週間ほどでした。

夏合宿　ＩＮ　南アルプス

59 期　山本 涼平

日本第２位の名峰、北岳。同じく第３位の間ノ岳。そして北アルプスの女王、仙丈ケ岳。こういった 3000m 峰を縦走した、今年の夏合宿 in 南アルプス。自分にとって初の南アルプスであったためか、とても充実した合宿となった。そんな夏合宿を振り返っていこうと思う。

１日目。この日は移動日ということで、登山口である広河原まで、交通機関を乗り継ぎ向かった。松本駅で電車に乗り遅れるというミスを犯したこと以外は、スムーズに行けた。もう少しで計画を変更せざるを得ないところだったので申し訳なかったと思う。時間には、注意が必要であると改めて感じた。

２日目。いよいよ登山開始である。1500～1600m ほどのアップであったが、結構いいタイムで登れた。個人的には白根御池小屋からの最初の登りがよかった。道は狭かったが、両側に花が咲き連なっていて雰囲気がとてもいいと思った。標高 3000ｍを超える、北岳肩ノ小屋にテントを張ったが、天気も良かったせいかとても暑かった。3000mがあれほど暑いとは思わなかった。

３日目。北岳から間ノ岳を縦走し、三ツ峰を経由し、両俣小屋まで行くロング縦走の日程であった。北岳山頂からは富士山、雲海、御来光が見え、

行った人だけがわかる、そんな何とも言えない素晴らしい景色が広がっていた。北岳を過ぎ、中白根山を越え、間ノ岳山頂へ。ハイテンションのなか、日本２位３位の縦走をして、いい雰囲気で登れたと思っている。とても楽しめた。間ノ岳を過ぎてからの縦走が想像以上にきつかった。危険箇所もところどころにあり、それ以上に、長時間の行動であったこと、ガスってきたことがつらかった。その分、両俣小屋に着いた時は、達成感に満ちていた。

４日目。前日の天気図からも予想はしていたが、あいにくの雨。前半はひたすら樹林帯を縦走。景色も見えず、メンバーのテンションもなかなか上がらない。たまに樹林帯を抜けても、ガスが濃く、風も強い。これが数時間続いたので、体力的には、合宿中で一番つらかった。なんとか仙丈ケ岳山頂に着くことはできたものの、仙丈のカールは霧の中。それでもここまで来た達成感はすごかった。その日は仙丈小屋を経て藪沢小屋で小屋泊。この小屋がすごかった。すごさはぜひ行って確かめていただきたい。

５日目。3，４日目に長い行程を消化したため、この日は、行動時間が短い。昼前に長衛小屋につき、ゆったりと時間を過ごす。長い合宿中にこういった日もあるのはいい。これで次の日は、体力が回復した状態で登れると思っていたが、４日目に痛めた自分の足の状態がよくなかった。

６日目。甲斐駒ケ岳へのアタック序盤でリタイアしてしまった。結局その後の鳳凰三山の縦走をカットし、ここで夏合宿が終わってしまった。メンバーの皆さんには迷惑をかけてしまい、申し訳なかったと思う。と言っても、とても充実したものになったと思う。

夏合宿は、ワンゲルのなかでは一番のイベントと言える。得るものも他の山行よりも多い。しかも１週間も山に入れるのは、学生の時ぐらいであると思う。１回１回の山行はもちろんですが、年１回の夏合宿がより充実したものになるよう、来年のラストの夏合宿に臨みたい。

夏合宿　南アルプス

60 期　松山 諒佑

大学に入って初めての夏合宿。南アルプスに登ってきました。雑誌などで取り上げられる南アルプスの雄大な山々は印象深く記憶に残っていて、高校生の時登山部に所属していたころから憧れを持っていました。この夏、そんな南アルプスに登れたことを大変光栄に思います。ルートは広河原～北岳～間ノ岳～仙丈ケ岳～駒ケ岳～広河原、と辿っていきました。

＜**1 日目**＞

金沢～広河原

今年開通した北陸新幹線で金沢駅から長野駅へ。車窓からは立山、妙高などこれまた素晴らしい山々が広がっていました。あっという間に長野駅に着き、普通電車で松本へ新幹線が速かったせいか、長野 - 松本間は非常に長く感じました。いや、実際長すぎました…(実際、１時間近く電車が遅れました)。電車の遅延により、予定では甲府へ普通電車で向かうことになっていたのですが、特急に変更。しかし、メンバー２人が乗り遅れるトラブルが発生。ゲートが閉まる都合上、この日の内に広河原に到着するのは厳しいとのことでしたが、タクシーの運転手さんの素晴らしい運転のおかげで何とか広河原に着くことができました。トラブルが相次いだ初日でしたが、逆に今となっては良い思い出です。

＜**２日目**＞広河原～肩の小屋

登山１日目は標高差約 1600mのしんどい登りでしたが、木々の合間から時々見える北岳に励まされながら登っていきました。大池山荘を越えると登山道の両脇には高山植物が咲き乱れていました。その後、しばらく上ると稜線にたどり着き、視界が開けました。北岳はもちろん、鳳凰三山、甲斐駒、仙丈といった南アルプスの山々を一望することができ、大変だったのぼりを忘れさせるくらい感動しました。それぞれこの後登るとは思えないくらい大きく構えていました。「あともうひと頑張り！」と声を掛け合いながら稜線を歩いていき、肩の小屋に到着しました。テントをたて、一通り準備が済むと全員それぞれ昼寝しました。この日の昼寝は今までの中で５本の指に入るほど気持ちのいい眠りでした。

＜3 日目＞肩の小屋～北岳～間ノ岳～両俣小屋

一日の始まりは北岳アタックという贅沢なものでした。登っている最中に日の出を見ることができました。さすが日本２番目の最高峰！と言わせしめられそうなほどに山頂での眺めは素晴らしく、富士山、中央アルプス、さらには白山までも望むことができました。稜線歩きでメンバーのテンションは最高潮、気づいたら目の前に間ノ岳が構えていました。農鳥岳や塩見岳などを見渡すことができました。後半、疲れが見え始めましたが、両俣小屋にたどり着きました。

＜4 日目＞両俣小屋～仙丈ケ岳～藪沢小屋

残念ながらこの日は雨でした。行程も長く、正直この合宿の中で最もきつかったです。風と雨にさらされながら、なんとか仙丈ケ岳に着きました。かなりの達成感を得ることができました。両俣小屋の主人に無料で宿泊できる藪沢小屋を教えていただき、小屋に泊まれるという事から、力を振り絞って向かいました。小屋に着いたときはもういっぱいいっぱいでした。しかし、先輩のザックを持ってみたところ、自分のザックとは比べられないくらい重たい...　先輩の偉大さを感じたとともに、来年までには先輩のようにならなくてはいけないと思うと課題も見えてきました。藪沢小屋は無料で宿泊できるにもかかわらず、布団が用意されていて山にいるとは思えないほど快適に寝ることができました。

＜5 日目＞藪沢小屋～長衛小屋

前日の雨はあがり、晴天の中この日はこれまでの疲労を考え、短めの行程でした。下りという事もあり、あっという間にこなすことができました。長衛小屋は綺麗な小屋で、甲斐駒ケ岳を見ることができました。小屋のビールで乾杯したり、名物の塩ラーメンを食べたりなど、長衛小屋を満喫しました。

＜6 日目＞長衛小屋～駒津峰～長衛小屋～広河原～長野

夏合宿最終日は甲斐駒ケ岳に登りました。花崗岩に覆われた甲斐駒ケ岳は南アルプスの中で異色を放っていました。登山道も他の山と異なり、岩がごろごろしていました。前日までの疲労が抜け切れず、6 合目の駒津峰で引き返すこととなりましたが、駒津峰からは駒ケ岳が目の前に見え、もう登頂したのと同じだったと思います。（笑）

登山のあとは途中温泉によって行きと同じルートで金沢に向かいました。... が、行きと同じ区間で電車が遅れ、最終の新幹線に間に合わなくなってしまいました。幸いＪＲの方がホテルをとってくれました。初日のトラブルのおかげ？でこのときは全く焦ることはありませんでした。翌日金沢につき、充実した夏合宿は終了しました。

尾瀬合宿

59 期　川堰 匡崇

行　程

1 日目　キリンテ～会津駒ケ岳～キリンテ

2 日目　キリンテ～（バス）～沼山峠～尾瀬沼休憩所～燧ケ岳～見晴キャンプ場

3 日目　見晴キャンプ場～東電小屋～三条の滝～東電小屋～ヨッピ橋～至仏山荘～鳩待山荘～至仏山～鳩待山荘

僕たちは夏休みに尾瀬に行ってきました。台風が来るなど天候にはあまり恵まれませんでしたが急いですべての山を登ることができてよかったです。山の内容は尾瀬というとハイキングのような簡単なものを想像していましたが、簡単な岩場や予定を短縮して上ったこともあり想像していたよりきつかったです。また天候が悪かったことできれいな景色をみることができなくて残念でした。今回一緒に登った人には、ご飯を作ってもらったり、わからないことをいろいろ教えてもらったりするなどお世話になりました。いろいろと迷惑をかけて申し訳なかったです。自分はこれから３年生になり下級生をひっぱって行くことや分からないことを教えたりしていかなければと思うので、山の知識を増やしていかなくてはいけないと思いました。またこれからもいろんな山に登っていきたいです。

ワンダーフォーゲル部に入って

60期　岡本 佳乃子

私はオープンキャンパスで見かけた気球部に憧れ、大学生になったら気球部に入ろうと思っていました。しかし、金沢大学には残念ながら気球部はありません。気付いたらワンダーフォーゲル部に入っていました。未だに入部理由を聞かれると困ります。ワンダーフォーゲル部に入り、山に登るようになり、初めてのことばかりでまだまだ戸惑いますが、先輩方に助けられてここまでやって来られたと思います。

初めてザックを背負い登ったのが医王山でした。山の中は蒸し暑く、重いザックと慣れない山道に体力はすぐ奪われていきました。時折吹く風が本当に心地よかったです。ザックを下してここまで登って来たのかと後ろを振り返るたびに、小さな達成感が得られました。そして、安堵もしました。無事テント場まで着き、既に鳶岩に登っている先輩方がゴマ粒でしたが認識できました。これからあそこに行くのか、大変そうだと、漠然と思っていましたが、私はここで勘違いをしていました。

道を進むにつれてあらわれたのは岩壁です。山道を登っていった先に鳶岩があるのだと思っていました。ミャンマーの山にあるゴールデンロックの縮小版ぐらいのイメージです。岩壁を登ることになるとは思っていなかったので本当に驚きました。まさか岩壁に登る日が来るとは。

トレーニング山行や夏合宿を経てもいまだにあの時の驚きは忘れられません。しかし、驚きだけではなく、しっかりとした達成感と楽しさもあの時感じました。楽しかった。これからも山登りをする上で私はまた新しい経験をするのだろう。その経験は決して楽しいことばかりではないでしょうが、それでも楽しみです。

鳶岩までの岩壁

鳶岩

黒部五郎は遠かった

6期　合津 尚

この6月に75才の後期高齢者の認定を目出度く拝領した。そこで何か記念登山をしなければならないと想い、北アの黒部五郎をターゲットにした。久しぶりに北アの山で賑やかでなく、テント泊に向いた山が選定理由だ。

7月末から8月上旬は恒例の白山・南龍小屋の集中があり、親父の法事があったりして、旧暦の盆休み明けの8月18日からとなってしまった。天候は南に台風が2個も発生しており、西には低気圧があって万全ではないのだが、この後には胃がんの術後の検査があるのでやむなく決行した。

久しぶりなので装備の確認や、食料の計画と調達で出発前日を終日費やした。登山そのものよりもこの煩雑な準備をする気力が最も重要だ、以前の山行きではコッヘルを忘れたりしているので。全部積み込んだら荷物は20キロ超になった。天気予報では19日からの山の天気は五分五分だが、富山行きの夜行バスに乗った。これで山行きの半分は終わったようなものだ。

早朝に曇り空の富山駅前に到着、運よく折立行きの直行バスに予約してなかったが乗れた。これは幸先良好だ。曇りで暑くなくて結構ということで、新調したストックを使い急坂を登る。樹林帯には杉らしい巨木が多く、稜線に出るとなだらかで左に薬師岳の山腹を見る。地図の時間では5時間のところ、6時間弱で太郎平小屋に到着。荷物の重さと体力からすればマズマズだ。そこから20分下った薬師峠のテント場に約30分で設営した。少しは段取りが良くなったか。遠くに見える黒部五郎を見ながら水割りを飲む。テント場には各大学のワンゲルの連中多数で、こちらも何か昔を思い出す。

さていよいよ食事だが、モンベルで調達した乾燥食は味が濃くて良くなかった。それにソーメンとキュウリにミョウガ、これではまるで7月の白山・南龍の時と同じだ。外で優雅に食事を楽しむ計画であったが、なんとブヨ・やぶ蚊の多いこと。昨年夏のカムチャッカと同じで、外での食事は無理。テント内の夕食ではロマン無しで艶消し。学生達は相変わらずで、トランプゲームとおしゃべり。

翌日は4時起床、明るくなった5時半からサブザックに2食と雨合羽を詰めて出発。地図では黒部五郎までは往復10時間だが、左ひざに農作業の靭帯疲労が残っており11時間が目標。途中でガスが出て雨模様となってきたが、頑張るしかない。ご婦人の集団には道を譲る。こちらの体力が落ちたのか、彼女たちが速いのか昔はこんなことは無かったのだが。黒部五郎の急登になるころから雲が切れて視界が良くなった。標高差300mを一気に上る。

縦走路の肩よりカールと頂上

頂上は地図の別名「大展望」とかで、素晴らしい眺望であった。周囲の登山者達も天候の急な回復に感激の声しきり。

頂上にて右より穂高・槍を背景に

右から笠ケ岳、穂高連峰、そして槍から水晶岳、立山・剣に薬師岳と全て見えた。目前には学生時代の根城であった雲の平50数年ぶりに再会。ここは北アのヘソであることを実感。持参

の水割りで念願の登頂を祝い、もう来ることは無いであろう頂上に別れを告げて下山。帰りにはまたガスが出て、時折には小雨で全く奇跡的な頂上の一瞬であった。疲労困憊でテント場に帰還した。

終日テント内でパタパタの音を聞いていても仕方ない。その翌日も天候は回復しないだろうから、下山に腹を決めた。テント泊のメリットはあまり無かったが、目的の黒部五郎は登頂できたし、薬師は二次的な目標だから、諦めよう。

縦走路から奥に薬師岳を見る

テント場からガスに隠れた黒部五郎の方向を眺めて、またも水割りを飲みながら登頂の達成感に浸った。それにしても黒部五郎は遠かったな。

さて夕食の準備をするが、全くタンパク質的な食料が欠けていることに気が付いた。ウイスキーは多かったがツマミも不足でした。夕闇迫るころには雨が降り出して、時間と共に強くなってきた。明日は薬師岳のピストンの予定だが、雨と霧の稜線を歩いても仕方ないし思案の一夜となった。フライシートに当たる雨粒のパタパタという音が煩わしい。明日の夜明けにまだ雨だろうから下山するか??

3時からテント内でモゾモゾと撤収準備を開始。朝飯は不味い乾燥食をカレー味で誤魔化し、雨中のテント撤収は全く久しぶりの体験であった。我ながらモタモタしながら腹を立てつつ、やっと5時半に下山開始。ここで2本の新調したストックが大いに役に立った。7月の白山で伊予君から1本杖では駄目と宣告され、2本のストックにしたのだが、下りでは本当に役に立った。膝への負担が大幅に減って助かった。

今回は目標の黒部五郎だけは登頂出来たので良しとしたい。帰宅してまだやる気だから装備もストックも乾かし、次回の登山に備えることにした。

旅が呼び起こしたラジオの記憶

10期　吉野 和彦

オスロ（ノルウェー）市庁舎の裏で路面電車を降りる。そこから小型船舶用の埠頭までは大きな広場になっている。その広場を私はやや早足で歩き、出発間際の巡行船に乗り込む。行く先はオスロ港と小さな湾を挟んだ対岸のビィグドイ地区である。そこは海から続く緩やかな丘陵地の住宅地域であり、いろいろな博物館が点在している所でもある。

訪れるのはノルウェー民族博物館、バイキング船博物館、コンチキ号博物館である。特にコンチキ号博物館は、旅の計画段階で地図にその表記があることに気付き、ぜひ訪問したいと考えていたものである。

今から60年ほど前、天井から吊り下がり笠を付けた電球が点灯していた家の中で、私はラジオの放送をわくわくして聴いていた。その番組は「コンチキ号の冒険」の朗読劇であった。

冒険の主導者はトール・ヘイエルダール。

彼は南太平洋の島々の文化が南米アンデスの文化と似ていることから、古代の南米の人々が海を渡りその島々に漂着したという仮説を立てた。それを実証するため彼と仲間は古代に入手できた機材（木、縄、布など）で筏船を作り、1948年に南米から風と海流に任せる航海に出た。この記録が「コンチキ号」の冒険となった。

巡行船はヨットから大型客船まで様々な船が停泊している港内をゆっくり進み、湾内に出て速度を上げる。天気は前日の雪のベルゲン鉄道と対照的に、雲がぽっかり浮かび初夏の陽光と冷たい空気の中を走る風とで気持ちが良い。かすかな潮の香と気持ちよさの中で一瞬よぎったものは、子供のころ夜の暗闇の海に一人で筏を漕ぎ出したときの恐怖心である。

コンチキ号の冒険をラジオで聴いていたころであったろうか、近所の友達と伏木の浜（現在は埋め立てで無い）で流木を縄で縛り合わせ、子供一人なら何とか乗れる筏を作った。理由は憶えていないが夜に乗ってみることになった。水際から数十メートル幅の砂浜があり、その先が防波堤で向こう側に人家があった。その電灯の明かりはほとんど届かないが、遠くの灯台や港の明かりで物の在り無しが漸く分かる状況の中、二人で筏を海に入れた。私が乗り棹をさし数メートルほど出した。顔を岸に向けると真っ暗闇で何も見えなかった。怖さがいっぺんに湧き出し直ちに浜辺に戻った。

ノルウェー民族博物館、バイキング船博物館を見る。そしてコンチキ号博物館に着く。

コンチキ号の実物は屋内に展示されている。これまでニュース映画やテレビでこの筏船が広い海原を航海している映像しか見ておらず、展示されている場所の限られた空間との比較や陸揚げしなければ見ることができない水面下の構造も見え、コンチキ号がすごく大きく見える。

バイキング船の流麗なキール構造は外洋の荒波への対処から生まれたものだが、方形の筏船ではキール構造がとれない。

そのため荒波でも壊れないように水面下の構造は太い丸太を数多く使い、三段に組まれ頑丈にできている。昔、日本でも見られた切り出した木材を組み、川を下る筏とは全く異なるものである。

コンチキ号の帆は大きな四角い一枚帆で上げ下げはできるが、風の方向との角度を自由に調整できるものではない。筏船の上には木を支柱とし周囲を樹皮で、屋根を葦のようなもので覆った船室がある。

炊事用具は出航当時のもので、その火器は私のワンダーフォーゲル部入部時のものと同じである。天測器具（今ならGPSであろう）があり、無線通信装置も積み込まれている。

コンチキ号は全くの孤立無援ではないものの、風と海流にまかせ南太平洋を三ヵ月半にわたり漂流航海し目的を成し遂げる。トール・ヘイエルダールなど五人の乗組員にあらためて尊敬の念を抱く。

「ウプサラ天文台は、ソヴィエト連邦（ソ連）が中央アジアで核爆発実験を行なったことを示す空気の微振動を観測した。」とのニュースが戦後何年かしてかなりの期間にわたり、たびたびラジオから聞こえてきた。この頃は、アメリカとソ連が対立する東西冷戦時代であった。核開発で遅れをとっていたソ連は、西側諸国に開発情報が漏れることを極度に嫌い、ヨーロッパから遠く離れた中央アジアで実験を行なっていた。スウェーデン

は北大西洋条約機構に加盟していなかったが自由主義国家であり、ソ連の核爆発実験には耳を研ぎ澄まし、これを把握すると直ちに公表していた。子供であった私はソ連がどのような国であるか分からなかった。しかしウプサラ天文台のニュースを聞くたびに、アメリカは核爆発実験の事実を公表しているのにソ連はなぜ事を隠すのか疑問があり、漠然とした不安を感じていた。

また次のことも憶えている。伏木は港町で外国船員が街中をよく歩いていた。私が浜で仲間と相撲をして遊んでいたとき、ロシア人船員三人（当時ロシア人は街中を歩くとき必ずグループを作っていた）が歩いていて浜に揚げられた伝馬船に腰を掛けた。私はソ連が世界で初めて人工衛星スプートニクを打ち上げた事を知っていたので、彼らに近づき、「スプートニク」と話しかけた。彼らは一瞬表情を緩め笑顔になったが、すぐに元の硬い顔になった。それ以上の言葉のやり取りは無く、私は仲間の方に戻った。

そのような訳でウプサラとはどのようなところかを見たくて旅の計画に入れた。

ストックホルムから古都ウプサラへは1時間に1,2本の高速列車があり所要時間は45分ほどである。ストックホルム市内の観光を中断し、ウプサラの町歩きとそこでの夕食を目的に列車に乗る。

ウプサラ駅のプラットホームから階段を下りると、そこは駅の下を通る幅の広いトンネルである。その緩い登り坂を抜けると駅前広場に出る。駅舎を通らず、広場からは古都を想わせる様な建物も見えず、ウプサラの第一印象は大きな田舎町である。ただこのあたりは新市街地で、ウプサラ大聖堂やスウェーデンで一番古いウプサラ大学に向かって歩いてゆくと、街の雰囲気はだんだん古都の趣が現われてくる。

途中にフィリス川がある。北欧への幻想からか、そこを流れているのが澄んだ水かと思っていたが、薄い黒褐色であり驚いた。いろいろ考える。近くに染色工場があり未処理の排水が流れ出ていることは？無いだろう。そして次のように考えるに至る。列車の窓から見える白樺に囲まれその葉の緑と溶け合うような淡い色彩の清楚な住宅や落葉広葉樹の林や畑地や牧草地の地下は泥炭で、そこを流れる水が褐色を帯びる（スコットランドの泥炭地帯の水は黒褐色）のではないか。そうであれば荒地を数百年にわたる手入れで住みやすい土地に変えた努力への敬意、と同時に大地の下には今も厳しい自然が存在するということ。川を渡り、古い石造りの建物に沿って曲がりながら坂を上っていくと北欧で一番大きな教会であるウプサラ大聖堂の前に出る。

日曜日の夕刻で人の気配もない。そっと覗くように大聖堂の大きな扉を開けると混声合唱の歌声が聞こえる。

20代から50代くらいの男女の無伴奏の合唱が大聖堂の中央部で行なわれている。歌われているのはミサ曲。石造りで天井が高い大きな空間に歌声がきれいに響いている。ところどころで指揮者の指導もあり合唱の練習中である。大聖堂の閉館時間も近いので訪問者も少なく静かに聴くことができる。合唱があまりにも素晴らしく心地よく聴けるので練習終了まで小一時間を過ごす。合唱団員にお礼を述べ、何か得をしたような幸せな気持ちで大聖堂を出る。

その後、大聖堂の周辺を歩き、川を渡り市街地に戻って食事をし、楽しい思い出を持ってストックホルムに帰る。

余談ですが、ヨーロッパを旅する機会があれば、その町や村の教会を訪ねることをお奨めします。それぞれの文化に触れ合えるだけでなく、予想外のことにも出会えるからです。今回も次のようなことがありました。ストックホルムのドイツ教会（ハンザ同盟で駐在していたドイツ商人が建てた）では、ステンドグラスに宗教的なものだけでなく、ジャガイモの収穫と庶民の夕餉の祈りの絵がありました。ヘルシンキ大聖堂（フィンランド）では小学校高学年を対象にした宗教教育が行なわれている場面に遭遇しました。

深田久弥＆山唄＆坂網猟

15期　舟田 節子

「深田久弥は、大聖寺・・・すなわち、石川県出身なんです！」
と言いたくなったことが何度もあります。
大枚払って「百名山、百名山」と騒いでおきながら・・・、どこの出身と言えた人に、まずお目にかかったことがありません。せいぜいよくて、茅ヶ岳止まり。
そこはたまたま倒れた場所であって、なぜ彼が山好きになったのか？どんな故郷が、彼の人となりを育んだのか？とは無関係です。
「よんじょもんは無知ねえ」と許す（？）として、地元ですらそれを知らない・・・。
最近はNHKの百名山放映で多少変わったようですが、でも、その中に入っている白山、それを故郷の山と讃えた深田久弥・・・と、スムーズにつながってはいかないのです。

さて、私の家に近い、卯辰山の麓東山地区は、深田久弥が、失意の時代を過ごした場所です。というか、「でした。」これを確かめたのが最近なので、私も、偉そうにはいえません。
昨年、『日本百名山』発刊50周年を機に上梓された、小品や新聞寄稿を集めた本を開いて「この本に出ている床屋は？」と探した結果、わかった事実なのです。
「久弥さま」も散歩した浅野川、卯辰山。その源流の医王山…急にキラキラ虹色に見えてきてしまった、幸せな節子でした。

そして、この舞い上がりを勢いにして、「四国お遍路を結願したら、高野山へお礼参りに行くでしょう。百名山も、深田久弥のふるさとから、雪の白山を拝んで『上り』とすべきです！それが筋を通した百名山です！」の自論をぶちました。
結果、来春は、東大法学部山の会ＯＢ会の公式行事として、「深田久弥のふるさとを訪ねる（＋坂網猟食談会・・・こっちが本命？）」が、行われることになりました。
今回は、そうなった経緯のお話です。

そもそもは、山唄が発端でした。４年前の冬、某ツアー会社の忘年山行に参加した時、あまりに懐かしい山唄を聞きました。ああ、これは私と同世代の、ワンゲル系出身者だなと見当がついて、唄を繋ぎました。「繋いでもらったのは初めて」というM氏は、来夏、ＯＢ会合宿で白山に行く予定とのこと。「それなら、最新情報を提供できますよ」と、連絡先をメモしました（その時点では、所属サークル名を聞いていない）。
帰宅後、さっそく送信されてきた計画書が「東大法学部山の会ＯＢ会」となっていてびっくり・・・が、この話のスタートです。やはり、あの歌詞の正確さは、並ではない！（知る人ぞ知る。私はKUWV歌集の二代目編集長でした）

続いて、雪の三つ峠山ツアーでも一緒になりました。彼がマネージャーとして、運営していること、現役の会はもう消滅しており、新ＯＢが補充されることはないので、実質自分が世話を出来る間の活動で終わるであろうということ。
それらを聞いて、今の現役の顔を私は知らないけれど、現役がいるということでどんなにノホホンとした気分でいられるものか・・・。ワンゲルが続いてくれている有難さを知りました。

そして、翌夏の白山。舟田夫婦は加賀禅定道へ降りる予定にして、前半をＯＢ合宿の彼らと同行することにしました。瀬戸野から登山バスに乗り合わせたら、興味津々そうな同行者達。旦那が一緒でよかったと思ったものです。
ともあれ、凍らせた果物や漬物や、凍らせたダシ汁を保冷剤にしてのソーメンと、地元組ならではのご接待に励みました。はるばると白山まで遠征頂いたのですから（と、見栄を張ったので、かなり重量オーバーでした）。
観光新道の花も盛りで、歓待してくれました。「現役時代は、花なんて見た覚えがないなあ」それは、幕営山行をやっていた者に共通でしょう。荷物が重くて、食当のノルマなどに追われて、関心はもっぱら地図に赤線をつなぐことでした。「花を楽しむ」も、老境に入ってからのことではないでしょうか。
山唄を唱和し、エールを掛けながら登っていく一行に、旦那は引いてしまい、「後から行くよ」でしたが、着いてからは、山話に合わせられてい

ました。
室堂周辺の花ガイドも喜んでもらえました。二度のツアー参加で白山贔屓になり、白山合宿を企画したＭ氏によれば、これまでは室堂に着いたら、「明朝は何時に集合」で解散。室堂周辺を回ってクロユリ大群落などを、見たことがなかったそうです。そして翌朝は、御前峰でご来光を拝み、大汝山で、一行と別れました。

実はM氏、この後に参加した針の木～五色が原のツアーで転倒、一瞬気を失うというアクシデントがあり、以後ツアー参加を拒否されることになります。「持病を懸念」が表の理由でしたが、実は、山行中の山唄がうるさいとの苦情があまりに寄せられたための、社長による指示とのことでした。
山唄を懐かしいと思う人もいれば、「苦しい登りの時だけ、エールのつもりで唄いますから」と断っておいても、やはり迷惑でしかない人も・・・。後者が多い時代です。
仕方なく、地元の山の会に所属した彼は、今度は感心され、歌集を作ってと頼まれているそうです。

ともあれ、夏のお礼を是非にとのことで、私は12月13日の箱根金時山（1213mの語呂合わせ）や、翌秋の裏燧合宿に同行したりもしました。
渋沢温泉小屋の夕食後には、やはり山唄の斉唱が始まりました。百名山の話題も、海外トレッキングの話題も十分に通じたので、趣味が共通語になる面白さを味わいました。

その間に、M氏も最後の皇海山を、深田久弥の登ったコースにこだわって、つまり、庚申山経由で百名山完登としていました。
それで私が、「こだわるなら、久弥の故郷で、雪の白山を拝んで『上り』とすべきです！」と主張することになったのです。
忍耐の冬を暮らす者にとって、たまさかの夕陽にピンクに輝く白山が、どれだけ崇高に美しく見えるものか。それが、久弥氏の山の原点となり、不遇の時代も支え、山を愛し続ける人生を全うさせたのです。だからこそ、久弥は(茅ヶ岳ではなく！)、白山の見える故郷大聖寺に眠っているのです。

本光寺にある深田久弥の墓

もちろん、墓参りにだけ・・・は酔狂すぎる話なので、坂網猟イベントをからませることにしました。さらには、この坂網猟保存会の会長を20期ＯＢ 中村元風さんが務めていることも知っていたので、これなら最高の接待が出来る！と思いました。
ほんと、いい気な節子の皮算用で・・・。元風さんに、2日目ガイドのＯＫをもらってから、あれ？同行を強要するほどの根拠はどこにもないのにと気づき、青ざめました。
ワンゲルという所、同じ部員だからというだけで、命を預かり、次の部員を将来には育ててくれるだろうという期待で、半年近くを新人育成に当てている組織です。能天気や寛大、もしくは誤解？（これが、最強かも）を含めて、人間関係は繋がっていくわけです。

さて、坂網猟という古式猟法は、大聖寺藩の鴨池で守られてきました。夕方池から餌場にむかう鴨を、Y字型の網を頭上に投げあげて捕獲。胃が空だから泥臭くなく、猟銃でないから血が肉に回らず、餌付けではない、最高の肉質を賞味できるのです。昔は鴨御殿が建つほどの捕獲量があったらしいですが、近年他に禁漁区が広がったことで、鴨達が鴨池に集結する必然がなくなりました。今では年間200羽ほどが、高齢化した猟師達に捕獲され、料亭に卸されています。
この猟師達が、戦後はＧＨＱと渡り合って禁漁

区を護ったり、餌場を維持管理したり、「ワイズユース」という言葉が出来る前から、それを実践していました。

中村さんは初代（なんと、これがまた、KUWV3期ＯＢの池本和彦様でした）から会長役を引き継いだのですが、「あんな可愛い鴨を食べるなんて、なんと残酷な！」という、自然愛護者達に、生物科出身ならこそなお判り易く、猟師達がいてこそ守られ、維持されていく生態系を、説いたのです。さらにはいよいよ猟師達が高齢化し減少していく中で、伝統を維持していくために、食談の企画や、猟場の見学（猟師達は基本的には嫌がる）も取り入れました。これらのアピールの結果、ジビエ流行の風潮もあり、新人猟師が増えだしたのです。

ところが、この鴨猟見学付き食談は、たった2回。開催日が決まった途端、押さえねばならなかったので、とりあえずM氏と、裏燧合宿でのリーダー夫妻の3人が遠征してくることになりました。

1月31日。雪花の舞う加賀温泉駅で集合。観光課のバスに乗り、まずは有名杜氏のいる酒蔵で、見学。たっぷり試飲させてもらってから、鴨池監察館へ。午睡中の鴨を観察し、動画を見、熟練猟師の話を聞きます。開口一番、「あんたら、よう2万円も払って、こんな所来るねえ」でしたが、その歯に衣着せぬ言い方で、少年の日、猟を手伝った時から、鴨との知恵比べに填まってしまったなどの話が、面白おかしく展開されました。

厳しい寒さの猟期、手ぶらの日が多いにも関わらず、この天気、この風ならと、猟場を選び（これは、猟期初めの抽選で、割り当ては2か所）、方向を定め、雄雌も見分けて、手作り網を投げあげるのです。

暗くなり、私達は厚手コートと長靴を借りて、近くの丘へ。猟の邪魔にならないよう、竹の囲いの中が、指定場所です。ポケットのカイロを握りしめていると、杉の陰で見えない湖面から、「さあ出かけるぞ」の鳴き交わしが「ガアガア」やかましく聞こえてくるようになります。と、二羽、三羽が頭上はるかに。そこここに待機していた猟師から、網は上がれど・・・これは厳しい。先の猟師さんの予想通り、鴨の多くは反対側の斜面の方をメインに飛び出していったようでした。

30分ほどで静かになり、それで猟はおしまい。網は中指で押し出すように投げるのですが（やらせてもらいました）、これで、鴨にかぶるように、前傾してなんて・・・鍛練というか、効率は相当に悪いといえそうです。

そこから料亭へ移動。「東京からのお客」は、説明役の最長老猟師の隣になるよう設定してありました。器の九谷焼も山中塗りも、食文化の厚み。治部煮を含む絶品の数々は、翌日の中村さんの説明によれば、倍以上の価ともいえる、特に吟味し用意された鴨が材料だったとのことでした。取材に入っていたＮＨＫのカメラには喜色満面の私達が集中して映り、「目撃日本列島」という番組名で、何度も全国放送に流れることにもなりました。

翌日は元風さんのガイドで九谷焼窯跡展示館を見学し、久弥の墓がある本光寺へ。深田久弥云々の表示は一切なく（観光案内図では寺名だけが判る）、「自宅の墓参のついでにお参りしている」という元風さんの先導なしでは、行きつけなかったと思います。

墓石の横には「読み、歩き、書いた」と彫られ、7年後に亡くなった志げ子夫人と、一緒に眠っておいでました。百名山完登の三人は、完登を目標に山を楽しませて頂いた感謝を込めてお参りしました。

「なんで、有名人久弥の故郷として観光資源にしないのだ？」（茅が岳の登り口には深田久弥公園があって、大きな石碑があります）と不思議だった私。騒々しくなるより、故郷の土に静かに眠ることを第一に考えたのが遺族の方達の合意だったのかな・・・と反省。だとしても、私のように「もっとアピールすれば？！」と考える俗っぽいのは、この大聖寺にはいないのでしょうか？それとも、かつてやってみて、醒めてしまったという経過なのでしょうか？お礼参りが出来たとホッとした一方で、やはり不思議でした。

一方、日本百名山発刊50周年の陶板記念碑の方は、元風さんが理事を務める組合で、赤字を出して制作したそうですが、設置場所は確認していないとのこと。こちらは、錦城山の山ガイドを書いたこともある私が、取っておいた新聞記事と照合して見当をつけた先に、無事鎮座していました。

背後が広く刈り開けられていて、晴れていれば、久弥の愛したふるさとの山白山が拝めるのでしょう。
でも、ここも、入口にそれと判る標識などはありません。

錦城山　日本百名山発刊 50 周年記念碑

さらに山の文化館を訪ね、生誕地の深田印刷所の前でも写真を撮り、今度は７期中山美津枝先輩に口聞きして頂いた橋立港の蟹屋へ。まずは「今から茹でます」と、タグ付き蟹を披露され、新鮮刺身の後に、アツアツで出てきました。それも１パイは、目の前で器用に手で捌いてもらえ、続いて包丁で切ったものが出てきました。

意地汚く克明に書いたのは、この話を知人にしたら、「自分は同じ店で、同じ金額を払ったけれどそんなご披露はなかったし、冷たいのしか出てこんかった」と言われたからです。中山先輩のご主人まで通して頼んだから、気を張ってもらえたんじゃないかと・・・感謝を込めてここに書いている次第。

もちろん、蟹は蟹の値段。でも、近江町での値段はよく知ってますので、この量で、この味で、この内容でだったら、断然安いです。

だいたいが、冬の鴨と蟹だったら、「覚悟！」しかない。メールでも一応そうは断ってあったのですが、交通費も払って、夫婦だったらこの２倍になるし・・・と、企画人はかなり恐縮はしました。

でも、ぼったくりとは違います。冬こそ旬の、最高の物を、産地で頂く・・・これこそ真の贅沢、至福！そうよ！残り時間少ないモン！！と、万札を用意し、翌日からは、清貧食・・・。

山の話の他に、お客は、海外駐在経験もあり、西洋陶器への関心もお持ちでした。中国へも活動の場を広げている元風さんとも、スケールの大きい話が楽しめました。

橋立港そばの蟹屋で『カニー!!』

コーディネーターは、胸をなでおろしつつ、加賀温泉駅でお客様を見送りました。「私も女房を連れてくればよかった。」のM氏の言葉にも安堵し、さらにはその後のテレビ放映が、何度もおいしい思いをさせてくれました。

このグルメと深田久弥のふるさとを訪ねる旅の話は、この秋、あちらのＯＢ会総会の話題をさらったそうです。そして、正式に、公式行事のうちになって、来年実行の運びとなりました。

そうなってこそ、いくつもの役職を兼務して地元振興にも尽力している元風さんに、お礼ができたことになると思います。

久弥の失意の時代とは・・・デビュー作「オロッコの娘」が実は前妻の書いた作品だったことが暴露され、文壇から干された頃のことです。故郷大聖寺に戻り、さらに、金沢に出て、雌伏の時代が続くのですが、その無聊をかこつ時、彼は梅の橋のそばから浅野川に下り、散歩したり、上流の山を眺めたりして過ごしたのでした。日本百名山他は、その後上京してからの仕事です。

久弥も私と同じ茂年生まれだったこと、また、6 年前、浅野川が 55 年ぶりに氾濫しましたが、その 55 年前の氾濫を、我が家の対岸で体験してもいること。

新幹線開業後、あまりに騒々しくなってしまった金沢。「久弥さま」の話は、ウフフ私知ってるモン！と、静かに胸に温めておいた方が、いいのかもしれません・・・。

南緯 51 度の追憶　パタゴニア・パイネ山群

17 期　小島 敬

1 枚の写真が人生を決めることがあるのだ。中学生の時、発売されたばかりの写真集『世界の山』を買った。表紙を飾っていたパイネ山群に強く魅かれたからだ。見慣れたスイスアルプスやヒマラヤの山々とは異なり、氷河に削られたパイネは独特の相貌を見せていた。『世界の山』にはこう書かれていた。「南部パタゴニアのパンパを西に突っきって行くと、パイネの山群が目に入ってくる。このあたりも、日本人には長いあいだ縁の遠いところであったが、最近になってから、登山隊や調査隊が数多く行くようになり、貴重な資料が手近に見られるようになった。」

最果ての地パタゴニアへの想いが募った。先住民が名づけたパイネという美しい言葉の響きにも魅せられた。さっそくＮＨＫのスペイン語講座を始めた。17 年後、南米で暮らすことになった。やった、これでパイネへ行ける。

南米パタゴニア：ダーウィンが来た！

パタゴニアとは南米大陸の南緯 40 度以南の地域を言う。一年中強風が吹き荒れる「嵐の大地」だ。面積は日本の 3 倍。かつてパタゴニアはインカ帝国の覇権も及ばぬ地で、ヨーロッパ人が侵略するまでは多くの先住民が暮らしていた。パタゴニア・アンデスを覆う巨大な氷床は、南極、グリーンランドに次ぐ広さだ。アンデス山脈をはさんでチリ側とアルゼンチン側に分かれる。西のチリ側は複雑にフィヨルドが入り組み雨や雪が多い。逆にアルゼンチン側は乾燥した大地だ。アルゼンチンでは、フエゴ島にある世界最南端の都市ウシュアイア（南緯 55 度）、氷河国立公園（ﾌｨｯﾂ・ﾛｲ山群、ﾍﾟﾘﾄﾓﾚﾉ氷河、観光拠点ｶﾗﾌｧﾃ）、海獣のコロニーがあるバルデス半島が知られている。チリではチリ最南端の都市プンタアレーナス、パイネ国立公園（南緯 51 度）が有名だ。世界最長のアンデス山脈（南北 7500km）はパタゴニアで徐々に標高を落として南下し、マゼラン海峡をくぐってフエゴ島で高度を上げダーウィン峰〔2440m〕を最後に南極海へ消えていく。

ダーウィンは若干 22 才で英国軍艦ビーグル号に博物学者として乗船し、西回りで 5 年（1831～36 年）かけて世界を一周した。ちなみにダーウィンの母方の祖父はウェッジ・ウッドの創始者。ビーグル号艦長はフィッツ・ロイ。南米の海岸線調査や海図の作製を目的としたビーグル号はパタゴニアやフォークランド諸島で 2 年ほど活動し、ダーウィンは先住民や動植物、地理等を観察し記録した。ダーウィンの『ビーグル号航海記』に登場する動物は今もパタゴニア各地で見ることができる。特にパイネ国立公園では保護が徹底されているのか、公園エリアにはいると急にグアナコが現われコンドルが舞う。グアナコ（ﾗｸﾀﾞ科）についてダーウィンは「野生のリャマはパタゴニア平原に固有の獣である。東洋のラクダに対応する南アメリカの代表といってよい。自然状態では優美な動物で、長く細い首と繊細な四肢とをもつ。（中略）6 頭から 30 頭ほどの小集団をつくってくらしている。」［上巻 p. 310］と報告している。

①グアナコ（パイネ国立公園）

コンドルの飛ぶさまは、こう称賛している。「コンドルが群れて、ある場所を旋回しつづけているとき、ほれぼれするほど美しい飛翔をみせる。（中略）あれだけ大きな鳥が何時間も、ほとんど力をいれることなく、山や河のはるか上を旋回したり滑空したりする姿を眺めることは、ほんとうにす

ばらしく、またうるわしい。」［上巻 pp. 348-349］パタゴニアではこの他にも南米駝鳥（ﾀﾞｰｳｨﾝ･ﾚｱ）やクロクビ白鳥などの鳥類、ハイイロギツネ、アルマジロなど多くの野生の生きものに出会える。

１）初めてのパタゴニア（アルゼンチン）

ありがたいことに南米にはクリスマスから始まる年末年始の長い休暇（約２週間）やカーニバルの休みがある。南半球なので季節は日本と逆、12 月～1 月は真夏で旅行シーズンだ。これを利用しパタゴニアを４回（アルゼンチン２回、チリ２回）、家族で訪れることができた。初回はブエノスアイレスから一気にウシュアイア（南緯 55 度）へ。南米大陸から切り離されたフエゴ島のウシュアイアはビーグル水道に面している。最果ての町らしく寂寥感がただよう。郊外には南極ブナ（ﾅﾝｷｮｸﾌﾞﾅ科）の原生林が広がっている。緯度が高い為、夜の 10 時を過ぎても明るくホテルの部屋のカーテンは分厚い。あくる日、町を歩いていると東北の気仙沼から来たという漁師に声をかけられた。カムチャツカ沖の北方漁場から締め出された日本の遠洋漁業は南半球の果てにまで来ているのだ。

ウシュアイアから北のカラファテ（南緯 50 度）へはラデ空軍航空（ｱﾙｾﾞﾝﾁﾝ空軍が運航）で移動した。軍服姿のキャビンアテンダントは美人だがまったく愛想がない。軍用機をそのまま転用しているのか機内は隙間風がよく通る。カラファテに近づくと乗客が騒ぎ始めた。右前方にフィッツ・ロイ山群〔ﾌｨｯﾂ･ﾛｲ3375m、ｾﾛ･ﾄｰﾚ3102m〕が現われたのだ。機体がひどく揺れるが、機長は軍人だからどんな状況にも対応できると信じるしかない。椎名誠は『でか足国探検記』で、凄まじいパタゴニアの風の中を飛び続けることの「耐えられなさ」をこう表現している。

「パタゴニアの飛行機は時として向い風に押し戻されてしまう、という話を急に思い出した。（中略）こういうマヌケな話は地上でビールでものみながら聞いている分には面白いが、実際にパタゴニア強風の空中にいるときにまとめて思いおこすというのは少々つらい。「ずがん！」と時おり大きく機体が落ちる。エアポケットとまではいかないが、気流の窪みみたいなものに強引に落下するというようなかんじだ。レンズ雲の下にフィッツ・ロイ山の鋭くとがった岩峰が見えてきた。その回りを別の激しく動く雲がとりかこみ、くねっているのが見える。（中略）「ヒロミいい子でいるからもうやめて」などとなぜかいきなりヒロミなども登場させながら、我々は疾風乱れ飛びの中でもだえはじめた。」［p. 100］

僕らのプロペラ機はようやく下降を始め、石ころだらけの荒れ野（＝滑走路）にためらいもなく着陸した。パタゴニアの空旅は冷や汗ものだ。

アルゼンチン湖畔にあるカラファテの町は氷河国立公園観光のベースだ。ペリトモレノ氷河（面積 250 ㎢、全長 35㎞）は地球温暖化にもめげず前進する数少ない氷河として知られている。展望台からは氷河の先端部（60m、金沢ｽｶｲﾎﾃﾙと同じ高さ）がアルゼンチン湖に轟音を立てて崩落するさまを間近に見ることができる。氷河の左の切り立った岸壁の岩棚にはコンドルの巣があり、時々親鳥が戻ってきては雛鳥の世話をしていた。ウプサラ氷河（面積 760 ㎢、全長 60ｋｍ）は流氷の中を船で近づく。この氷河は温暖化の影響で毎年 60m ずつ後退している。夕食はパタゴニア名物、羊のアサード。丸ごと焼いた羊の開きをナイフでこそげ落として食べる野趣あふれる料理だ。パタゴニアにはブルーベリーのような青い実をつけるカラファテ（ﾒｷﾞ科）の低木が多い。町の名の由来となったこの木には『カラファテの実を食べるとまたパタゴニアを訪れることができる』との先住民のありがたい言い伝えがある。

翌日はタクシーでカラファテ郊外へ出かけた。なんとも愛想の良い運転手で「羊の牧場と国境警備隊を見たい」とお願いすると二つ返事で連れて行ってくれた。夏は毛刈りの季節だ。牧場では羊たちがまたたく間にバリカンで丸裸にされていく。国境警備隊事務所では食事中だったが部屋に通され温かなスープとパンをいただいた。「どこから来た？」「アルゼンチンは好きか？」と質問攻めだ。海外に暮らすと日本人でよかったと思うことが多い。特に小さな女の子連れなので、どこでも警戒感なく受け入れてもらえる。この子連れ日本人がいきなりザックから自動小銃を取り出して乱射する場面など想像もできないのだろう。平和を輸入した日本はこれからも平和を輸出していくことが大切なのだと思う。アルゼンチンと

チリは昔から仲が悪く、前年のフォークランド（ﾏﾙﾋﾞﾅｽ）紛争時にチリは英国を支持している。でも国境警備隊員たちはまったりとして緊張感のかけらもなかった。これがラテンの良さなのだ。

②コンドル

警備隊の事務所を出ると、コンドルがはるか上空を優雅に旋回していた。どこからか♪コンドルは飛んでいく、の唄が聞こえてきた。

２）２回目のパタゴニア（アルゼンチン）

カーニバル休暇を利用し三泊４日でアルゼンチン中部のバルデス半島（南緯 41 度）へ行った。パタゴニアの入り口だ。大西洋に突き出たバルデス半島は全体が自然保護区になっている。オタリア（ｱｼｶ科）とミナミゾウアザラシは、繁殖の為 12 月から 2 月にかけ大挙して上陸しハーレムを作る。海獣たちが波打ち際で寝そべっている様子はとてもユーモラスだ。バルデス半島の南 200km にあるプンタ・トンボは数十万羽のマゼラン・ペンギンが暮らす一大コロニーで、海辺近くに巣穴を掘り子育てをしている。数えきれないほどのペンギンが巣穴から出たり入ったりしている。まるで「モグラたたき」のスローモーションだ。

３）憧れのパイネ山群へ（チリ・パイネ国立公園）

サンパウロからチリのサンチアゴへ飛ぶ。アンデス山脈を越える時、アメリカ大陸最高峰アコンカグア〔6960m〕のどっしりとした山容が望めた。当時のチリはピノチェトの軍事独裁が続いていた。1970 年に世界で初めて自由選挙で誕生したアジェンデ社会主義政権を、1973 年 9 月 11 日に米国の支援を受けたピノチェト将軍が軍事クーデターで倒したのだ。南米で「9.11」と言えばこのクーデターを指す。この頃、僕は教養部にいて留年の心配をしつつ秋の PW でどの山に登るか悩んでいた。地球の反対側の政変には甚だ無関心だった。サンチアゴの夜は旧知の駐在員夫妻と会食。サンチアゴは地中海性気候で住みやすいとのこと。チリ・ワインの産地でもあり海に近く海鮮料理もおいしい。サンチアゴ近郊のアンデス山麓は南半球最大のスキーリゾートで冬季オリンピックの候補地になったこともある。駐在員夫妻はスキー道具一式を日本から持参していた。

次の日、サンチアゴからプンタアレーナス（南緯 54 度）へ。マゼラン海峡に面した人口 12 万のチリ最南端の都市だ。海ではイルカが跳ね、対岸にはフエゴ島が静かに横たわっている。翌朝、頼んでおいた車でパイネに向かう。ドライバーはホセ、寡黙で実直そうなチリ人だ。草原の中の一本道をひた走る。時折、移動する羊の大集団が通せんぼする。5 時間ほどで港町プエルトナターレスに着いた。目の前には最後の希望（ｳﾙﾃｨﾏ・ｴｽﾍﾟﾗﾝｻ）湾が広がっている。大きな湖のように見えるがフィヨルドだ。強風で白波が立つ中をクロクビ白鳥の群れが器用に浮かんでいる。ホセお勧めの地元レストランで昼食。具だくさんのシーフード・スープは地味豊かで体があたたまった。ここから更に北上しパイネ国立公園へ向かう。茶色のコイロン（ｲﾈ科）が埋め尽くす単調な荒野が続く。人家は全くない。はるかかなたに山の連なりが見え始めた。パイネだ！

公園ゲートをくぐるとグアナコが姿を見せた。パイネ山群をグレイ、サルミエントなど、いくつもの氷河湖が取り巻いている。そのひとつペオエ湖に浮かぶ小島に２階建ての小さなホテル Hosteria Pehoe がある。ホテルは４年前の氷河洪水（ﾖｯｸﾙﾗｳﾌﾟ）で流失し再建されたばかり。島への人道橋を猛烈な風にあおられながら渡りチェックイン。正面には「チリの宝石」と呼ばれるパイネ山群（ﾊﾟｲﾈ・ｸﾞﾗﾝﾃﾞ〔3050m〕、ﾊﾟｲﾈの角（つの）〔2600m〕、ｱﾙﾐﾗﾝﾃ・ﾆｴﾄ〔2668m〕）が聳える。ここに三泊し、僕らはパイネを眺めたりペオエ湖畔を散歩したりして、のんびりと過ごした。ここにもカラファテの木はあった。「またパイネに来られますように」と願って青い実をいっぱい食べた。パイネのトレッキングルートは良く整備され、要所に避難小屋があり１週間ほどかけて山麓を一周することができるそうだ。ホテルにはチリ国内を始め色々な国の人たちが泊まっていた。大晦

日の食堂は、年越しパーティーのギター演奏や踊りでいつまでも賑やかだった。

③ペオエ湖散策　正面はパイネの角

新年をペオエ湖畔で迎えた。眼前には朝日を浴びたパイネの峰々。夢のようだ。きょうはパイネの塔（ﾄｰﾚｽ･ﾃﾞﾙ･ﾊﾟｲﾈ〔2850m〕）と呼ばれる3つの岩塔を遠望できるアスール湖へ行く。ペオエ湖は氷河湖特有の灰色をしているがアスール（青い）湖はラピスラズリーのような群青色だ。水鳥が多い。フラミンゴやカイケンなどが遊ぶ湖の背後にパイネの尖塔群が並んでいた。パイネを去る日、もう一度アスール湖に寄り帰途についた。姿を変えながら遠ざかっていくパイネ山群を名残惜しくいつまでも眺めていた。

4）パイネ再訪そしてアタカマ高地へ（チリ）

学生時代に読んだ向一陽の『アタカマ高地探検記』（1974年）の中で向が「世界最悪の場所」と呼んだチリ北部のアタカマ高地のことが、ずっと気になっていた。日本へ帰国する前にアタカマへ行こうと思った。さすがに「世界最悪の場所」へ家族単独では行けないので、ブラジル駐在中に親しくなった現地旅行社のKさんにツアーの組成と添乗をお願いした。12人集まった。パイネとアタカマを結ぶチリ南北ツアーだ。パイネへ行くほんの2ケ月前、チリでは歴史的な出来事があった。「信任投票」（1988年10月）で国民がピノチェト政権にNOを突き付け、15年間続いた軍事独裁が終わったのだ。そんなサンチアゴの街の変化にはまったく気づかず、能天気な僕らはパイネを目指したのだった。再びのパイネは素晴らしかった。青い空も流れる雲も山も氷河も湖も、大地に生きる動物たちも美しかった。ここには人工のさかしらなどない。吹きすさぶ風が、すべてを浄めているのだと知った。

サンチアゴへ戻り、北のカラマ（南緯22度）へ飛び、バスで標高3000mの地点を越えアタカマにはいる。アタカマはALMA電波望遠鏡で有名だが当時はまだ何もなかった。世界で最も乾燥しているアタカマ砂漠は、東西160km、南北1000kmの盆地型高地砂漠だ。草一本生えていない荒涼とした褐色の大地がどこまでも広がる。リカンカブール山〔5916m〕を始めとするアンデスの連なりがくっきりと望める。むき出しの地球を見た思いだ。ここでNASAが火星探査ロボット機の実験をしたのもうなずける。夜は満天の星が楽しめる。南回帰線の北に位置するサンペドロ・デ・アタカマ〔標高2438m〕はアタカマ探訪の拠点、アドベ作りの家が並ぶオアシスの中の小さな村だ。南方には世界最大のウユニ塩湖に次ぐアタカマ塩湖があり、多くのフラミンゴが棲む。羽根が赤いのは餌にしているプランクトンの色だというが過剰な塩分摂取で高血圧にならないのだろうか。村からはアタカマ高地を越えてボリビアやアルゼンチンへ抜けるルートがある。今年（2015年）のLOOK-JTBのパンフレットを見ていたら、“アタカマ高地からウユニ塩湖に行くツアー”が載っていて驚いた。「世界最悪の場所」も今や大手旅行社が催行する時代になったのだ。

カラファテの実を使ったジャムがパタゴニア土産として現地でたくさん売られているようです。もし日本で手に入れる機会があったら一度食べてみてください。パタゴニアへ行けるかもしれません。

パタゴニアを読む

ガストン・レビュファ、近藤等編集協力『世界の山』（1966年）集英社［文中引用p.117］
C・ダーウィン『新訳　ビーグル号航海記　上下巻』（2013年）荒俣宏訳　平凡社
椎名誠『パタゴニア　あるいは風とタンポポの物語』（1994年）集英社文庫
椎名誠『でか足国探検記』（1995年）新潮社
野村哲也『パタゴニアを行く　世界でもっとも美しい大地』（2011年）中公新書
パタゴニアを観る
NHK『パタゴニア・パイネ山群(1)～(3)』世界の名峰グレートサミッツ（2012年）

近年の、外国での記憶から

11期　長岡 正利

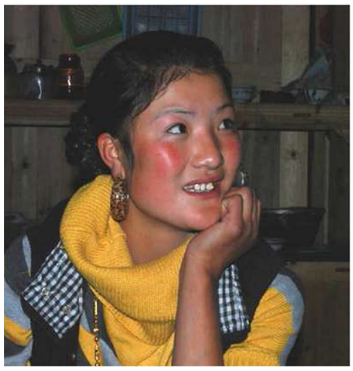
『やまざと』誌では随分ご無沙汰の長岡です。時には、奥名様のOB会HPにて、写真を掲出して頂いておりますが、インターネットをご利用ではない方もいらっしゃいますので、こちらにて、近年の写真を紹介させて頂くことにしました。なお、遅れての投稿で、ご担当の谷内様には大変ご迷惑をおかけいたしました。

その１：中国四川省、ミニアコンガの一周　2010年に

一帯はチベット民族の人たちが昔から住んでおられた地（四川省カンゼ・チベット族自治州）です。ヒマラヤ山脈の東、「横断山脈」と呼ばれる一帯で、その山々もさることながら、花と人々も仲々素晴らしい地です。山の東はもの凄い観光開発ながら、ここに紹介の西側では訪れる人も稀です。

上写真は、ミニアコンガ（7556m）を巡りつつ、西側の各所からの眺望。夏は雨期で、滅多に晴れず、晴れても天候変化はめまぐるしくて、時には雪霰の強風も。

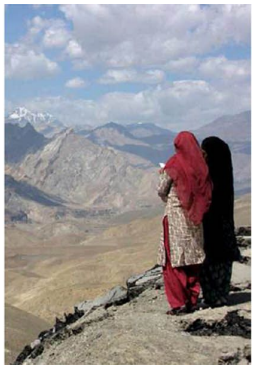
雨期ですから、標高3500～4000mの地では、花々が見事に咲き揃っています。高所では貴重な薬草も沢山採れて、放牧とともに良い収入源だそうです。



この地は、知る人の間では名高い「美人谷」。サムジュン村のヤンツェさん。中央は、お祭りでの家族天幕内に請じ入れられての撮影。ハレの日ですから、化粧・身繕いも仲々に愉しげに。

その２：インド北部のチベット文化圏、ザンスカールへ

インド・パキスタンの係争地域・カシミールの東部、インド支配地域でチベット文化圏のラダック、さらに南のザンスカールに出掛けたのはかれこれ30年前のこと。それから数回で、最後が2011年夏でした。訪れるごとの変貌には、ただ驚くばかりです。



上は、「雲南懇話会」での以前のお話しスライド冒頭。右は、関嶺の彼方のこの地を望んで。
次URLに沢山の写真を。：http://ur0.link/pErU ← これは短縮化URL

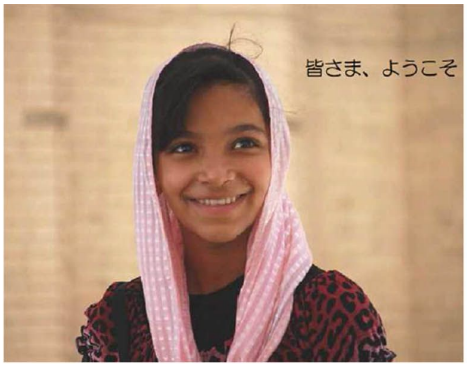
極寒・酷乾の地ながらも、捜せば綺麗な花々もかなり色々と。

何と言っても、チベット密教の図像には、素晴らしいものが数々に。そのお祭りも愉しい。

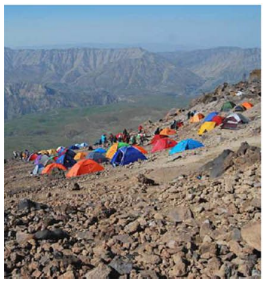
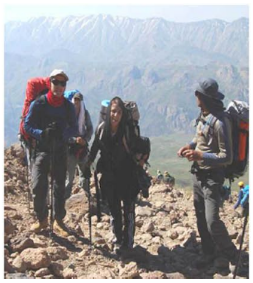
30年後に、上掲の人たちの消息を聞いたところ、「覚えている。みんな外へ行ってしまった」由。

その３：イラン、遺蹟とデマバンド山へ

2012 年夏には、イランへ。各地の史蹟巡りと、国内最高峰デマバンド山へ。多民族・多宗教、そして何よりも、日本に親しみを持つ人たちの、素晴らしい国です。下は、最近何かと話題の、独自の国家を持たない人口 3000 万人のクルド民族の、１家族（この人たちはイラン国籍）。



上は、「雲南懇話会」でのお話し(講演)スライドから：http://ur0.link/pEuT ← 短縮化URL

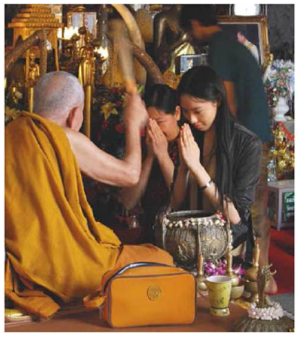
デマバンド山(5610m)は、若い人たちで大賑わい。女性も、都市におけるとは別世界のように。

著名な史蹟から、２つをご紹介。ペルシア・サファヴィー朝のアッバース１世が、16 世紀末に築いたイスファハン、その繁栄は「世界の半分」と讃えられた。壁画には、当時の典雅な生活ぶりが。

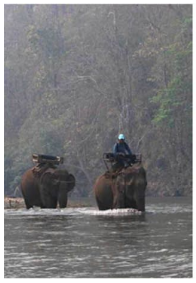
紀元前６～４世紀のアケメネス朝の祭祀都市ペルセポリス。神殿壁面には、周辺諸国からの朝貢者など。アレクサンダー大王の遠征によって破壊され、それ以降廃墟となっていた。

その４：タイ北部の仏蹟、スコータイなどへ

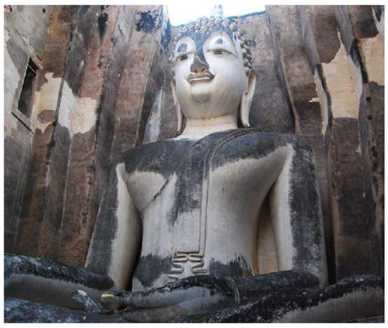
2013 年の春は、乾期・酷暑のタイ北部仏蹟を巡ってきました。観光シーズンではないので、もともと観光客の少ない北部では宿泊施設も閑散。博物館も幾つかは店じまい。南部とは違って、お寺の雰囲気や人々ののどかさは、ビルマ風。左下写真は、ビルマ（ミャンマー）に近いメーホーソン。



若い人たちも、敬虔な仏教徒です。下はメーホーソンから西、サルウィン河支流に沿って。



ビルマに向かって、道はやがて無くなって河が交通路に。ビルマからの難民、カヤン族（首長族）の人たち。この輪をつける人は、出生時に選ばれる由。



タイの仏教の黄金期といわれる、13～15 世紀のスコータイ遺蹟。いずれもおだやかな姿の仏様。

更にずっと南下して、14～18 世紀のアユタヤ王朝の遺蹟。乾いた大地に、静かに佇立する仏塔の趣きですが、実は敷地（世界文化遺産指定地）ギリギリまで右のような店の集合・観光地で、仏塔に到達するまでが一苦労の地です。30 年ほど前は、粗末な土産屋が数軒だけの地でした。

その５：夏のカムチャッカへ

2013 年７月は、ロシア・カムチャッカへ行きました。そのアバチャ山(2741m)などに登頂。

着陸間近の機窓から各所に火山を見る。上、手前はカール地形。郊外から見たアバチャ山(右)。

山麓から見たアバチャ山(右)と、コリャーク山(3456m)。下は、お世話になったガイドさん。

登頂したアバチャ山と、向かいにあるコリャーク山。右は、それらの西にある氷河地形の山地。

７月は花の季節。左(インディアンペイントブラシ)を除けば、日本の山で見たような花も多い。

編集後記

皆様のご協力によりＯＢ会会報「やまざと」vol.30 が今年も年末発行にこぎつけることができました。ＯＢ会活動報告、同期会便り、現役よりの報告、投稿、どうぞお楽しみください。小屋作業報告も寄せていただきました。犀奥のベルクハイムに思いを馳せて頂ければと思います。そして、元顧問の大村一夫様よりお便りいただきました。長い間、お世話になりました。

本号に原稿をお寄せいただきました皆様、感謝申し上げます。また、これからもＯＢ会、現役の皆様の安全な山行、ご活躍をお祈り申し上げます。

金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会　会報誌「やまざと」vol.30

発　行　日　2015 年 12 月

発　行　者　久冨 象二（ＯＢ会会長・ 20 期）e-mail chmxm643@ybb.ne.jp

編集・印刷　デザイン・プリーズ

ＯＢ会事務局　〒921-8174　金沢市山科町ヌ74-13　森 恵利子（22 期）

TEL　(090)1310-8615

e-mail　（ＰＣ）mori2000@sr.incl.ne.jp

（携帯）erieri-8615@r.vodafone.ne.jp

ＯＢ会ホームページ　http://www.kuwv.net　管理人／奥名 正啓（15 期）

ＯＢ会費払込口座（口座名義：金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会）

郵便局（通常払込）　00780-3-14120

ゆうちょ銀行〇七九支店　当座預金 No.0014120

北國銀行本店　普通預金 No.223703

《事務局から》

- ＯＢ会は皆様のＯＢ会費で運営しております。今年度は会費未納の方のみ「会費納入のお願い」を送付させていただきました。ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。
- 住所が変わられた方は、お手数でも事務局 森（mori2000@sr.incl.ne.jp）までお知らせいただけると幸いです。また、お知り合いの OB 会員の住所変更をご存じの方がおいででしたら、上記、事務局までお知らせください。特に、各期の代表、窓口になっておられる皆さんのご協力をお願い致します。
- 奥名さんから定期的にｅ-mail でＯＢ会通信を配信していただいております。配信をご希望される方はご自分のメールアドレスを奥名さんまでお知らせください。
  ※奥名さんのメールアドレスは　ma-okuna@nature.email.ne.jp　です。
- 事務局ではやまざと原稿として、皆様からの近況報告を随時募集しております。同期会の集まりや、個人の山登りなど、団体・個人を問わず簡単な報告で構いませんので、事務局 森 mori2000@sr.incl.ne.jp　までお送りください。お待ちしています。